

おんじやる 「おんぢやる」を見よ。

おんぞうあぢ 「おんぞうまぢ」を見よ。

おんぞろ 化物ならばおんぞろか、たとひ誠の人間にても手練を見よと、太刀さしかざし(實古教信)

「おんぞろ(鬼族)の撥音歌。鬼で候の義。奥。「ぞろ」は「節季ぞろ」又ぞろ」などの「ぞろ」に同じ。

おんたらし 抑も暮目と申すことは、天竺のおんたらし、我が日本の天の香具山の黄楡の木(天竺)

「おんたらし(御執)の輦。御弓。萬葉集巻一に「夕庭伊織立の御執乃枝弓之奈加理乃」平家物語巻十一、弓ながしの條に「御たらしなりと申すとも」

おんぢやる 釣屋形にぶち乗つて、一つ買をもした者でおんぢやり申したさ(加増曾杖)

「おぢやるに撥音、ん増加した語。おぢやる」を見よ。

おんてもない 六道の辻にて必ず巡り逢はうぞや、おおんぢでもないこと、たとひ畜生界に落ち蟲けらに生るとも、同じ蟲に生れうと思ひつめたが(今宮)もとのやうに懇にかはゆがつて下さるか、おんぢでもない事、女と縁さ一切つたらば(萬年草)

當然である。勿論である。言ふまでもない。按ずるに「おん」は「恩がまし」「恩がら」などいふ恩であつて、「おんぢでもない」は即ち「恩でも無し」の義である。この詞、狂言・笠の下などにも見えてゐる。

おんてん 御願私願隱田押領寺社盜賊等までも、現非を判ち治めんと(佐々木)

「隱田(彌田)をこましくして課税を避けた田地。和訓栞に「おんてん」屋訓往來に隱田と見ゆ、田園を隱し置をいふ、隱田といふ語は類聚國史、東鑑などにも見えてゐる。

おんども 「おん」を見よ。

おんども おんどもが二十七の年薩摩者と喧嘩した話(博多)

「おれどもの長崎國説。吾等此の語現今も長崎地方で用ゐられてゐる。熊本地方では「おんども」鹿兒島地方では「おんども」といふ。

おんぼう うぬが組袍、腰に指いた赤鯛も早く此處へまげ出せ(龜山遊)

「組袍。羅はからむしの綿入を云ひ、袍は衣のなかつたあるものを云ふ。組袍は即ち綿入の服であつて、衣の賤しきもの。論語子罕篇に「衣敝緇也」。

おんまはす わり立ておんまはし、火水になれとぞ戦ひける(女楠) 割立しておん廻し、無二無三に斬入れば(國姓爺) 蜘蛛手かくなわ十文字、割立ておんまはし。さんざんに斬立たれん(反魂香)

「おんまはす(追魂)の詠「まが黒にかゝる音である爲に、その上の「ひが鼻」になつたのである。

おんやうけ 陰陽家には、せんきゆりの蛙息を吐いて虹となると沙汰せり(蛙合歌)

「陰陽家」古くは「おんみやうけ」と讀んである。中古陰陽寮に出仕し、天文齋歌のことを掌り、陰陽五行の理によつて吉凶を占ひ、災禍などを祈禱する者、陰陽師ともいふ。

おんら おんらが在所(博多)

「おれら(白等)の長崎國説「おれども」おんども」といふ同じ言方である。

か

か お年寄の我が強く(大經師) 親がかくまふと聞えては、さきに我が立つて免したうても免されぬ(大經師) 某も男の我が(曾根崎) おのれ重れて去られたらば、顔も見るまじ物言ふまじとの我もありし(曾根甲)

「我我強。意地張。

かい 我はすなばち摩訶迦葉戒授け申さん(釋迦)

「戒制禁の義。戒は防非と懇の力あつて、これに止持と作持とある。この二持戒を行するに於て五戒・八戒・十戒などある。戒授く」とは、五戒・八戒・十戒等の戒律を佛弟子・信者の境遇に應じて、その何れかを授けるを云ふ。「かひ」を見よ。

かい 諏訪へ踊見がい行く行違ひに(博多)

「かてらまたは」にの意にいふ長崎國説で、現今も用ゐられてゐる。熊本では「見きや」といふ(これと別に「がい」といふがある。「がい」を見よ)。

かえき 殿様のお耳に立てばよい仕合で御改易(夕霧) 御機嫌に違ひ、改易仰付けらるるとて御恨み候まじ(反魂香)

「改易(徳川時代に武士の受ける刑であつて、

族籍を除き家祿を召上げられるもので、切腹よりは輕く墾居よりは重い)。

かいかね おしつけの外れよりかいかねかねて斬込まれ(世繼曾杖)

「屏兩脇の背の高くなる所。徳名抄に「屏。番甲、加以加爾、今俗語呼加以加良保備、肩之下也」。

かいき がいきを祈るは風の宮(女殺)

「吸氣風邪。飯頭屋本・節用集に「吸氣」今も福井縣越前郡あたりでは、風邪を「かいき」と云ふ。

かいきやう 此母が戒行の拙きゆゑと(龜山遊) 妻二人子二人の命を取つて忠孝の道を立つるあさましさ、恩愛慈悲の道缺けて、心に任せぬ戒行やと、顔を見てはわつと泣き(大難冠)

「戒行」一旦戒體を發得した者は、能くその戒體に隨順して行ひを正しうすること。翻譯名義集に「戒行清高、總業優勝」。

かいく 馬上の武士の袷上下皆具まで(女殺) 小栗御覽じ、遂に召されぬ馬ならば鞍かいくも候はし、裸脊に乗つて見せ申さん(小栗判官) 馬鞍皆具の綺羅帷子(百日曾杖)

「皆具(馬を鞍小)一切の具。

かいくれ 朱雀の御所の邊を通れば、貴賤に限らず男たる者かいくれに行方なく、二たび影も見ることなし(女護扇)

「撞著(撞き寄れて)見えぬ義、下打消に應じて副詞。全く。まるで。

かいかげ 百由旬の血の池を鐵のかい

げに波みほせと責めらるる(三世相柄) 柄杓でもかかげても泥水でも苦しうない(日本武尊)

【挿節】小桶をいふ。海人漢芥に「湯を汲み桶節懸くる所へ深し左手に湯をそへて懸くるなり。和訓栞に「かかげり或は杓をよめり。加賀に片手桶をいふ。」

かいげん 宗味が刻鐘の開眼、鹿相な非時致します(審庚申) 人の來ぬ間にあの蚊帳の開眼をせまいか(歌念佛)

【開眼】鐘眼を開く義。佛像梵鐘などを調製して、これを奉事しようとする時に高僧を招いて安置の式を行ふ、これを開眼または開眼供養といふ。轉じて新調の器物などの使初をいふ。

*かいざん 拜み願ふは今參る如來様御開山、佛に嘘はつかぬぞ(冥途飛脚) 大唐四百餘州の美人のかいざん、楊貴妃・虞氏君・西施・李夫人・王昭君も、そこらへそこらへ及びもない事(開八州)

【開山】寺院を創建し、または宗派を開いた高僧をいひ、轉じて何にても始めて基を開いたものを云ふ。

*かいしやく 淡海公も手を放し、介錯申す人もなく、紫宸殿の階段を撫で探り、足をうげやうやうとして堂上ある(大鑑冠) とてももの情けに御介錯早う早うと苦しむ(薩摩歌)

*かいせいらく 波の鼓の海せいらく、西の海の青きが原の波間よく、

り(加増曾我) 【海青鏡】真鍮調の鏡。この文は、謡曲・白樂天によつたものである。山影のうつるか云々を見よ。

*かいぞへ 其外かいぞへ衣被、長刀傘、ざんざめいたる供先(杵釘) 【介添】附添。附添人。和訓栞に「かいぞへ。挿添の義、後世の詞也。」

*かいだて 岩壁に垣植築き、要害險阻を帯びたり(國性爺) 【垣植】植を築きて垣とせるもの。

*かいぢやうゑ あら面白の山水や、峰に戒定惠の梢を竝へ(釋迦) 【戒定惠】佛者の修むべき三徳に配すれば、律惠は戒學、經惠は定學、論惠は慧學である。砂石集に、「僧といふは戒定惠の三學を宗として。」

*がいぢん 御味方大きに勝利を得凱陣仕り(甞合歌) 【凱陣】戦に勝つて旗が陣營に歸ること。

かいと、こりや祈經、朝比奈が元服祝儀振舞の門に立ち、喚き騒ぐ法知らず、汝ばかりとか非人めか(加増曾我)

*かいどり 歩むとすれどかいどり、の、身辨煩辭引包む(雲女) 【挿取】袷衣。打掛。近古。婦人禮服の一で、帯をした上に打掛けて着る小袖。

*がいに がいに出度い此方の御壽命語るべいなら、鶴と龜とが何打食つて(雲女) やあ、がいになま

ぬるつこい番太めと(願八景) がいに見がまひさうな五人兄弟 甚だおめでたし。この語現今でも備中小田郡あたりで普通用いられてゐる。但言集巻に、「がい。又分えともいふ。物の多きを云ふ。ガイにつめたないといふ、異にと云ふ事歟。然ればゲエの方正に近し。物類稱呼・五言語部に「伊豆駿河邊にはイカイと云ふ又ガンカウとも云ふ、上野に野風と云ふ、陸奥にてデツカ、仙臺にてオカカルと云ふ又ガイとも云ふ(開果すて云ふ)。」

がい 言ひたいがいに言ひこめて死んでまた言ひたらぬか(卯月調) 【がひ】を見よ。

がいによさんぜん 界如三千の帆を揚げて諸法實相の追風を得(大覺) 【界如三】天台の一念三千の觀法を云ふ。三千の諸法は十界と十如とよりなり、一界に各十界を具し、それに各十如を具し、それに各三種世間を具するが故に其數三千の法を成す。

*かいはやく すばや御法もかいびやくの、ほうげいの聲告げ渡る(釋迦) 都の辰巳思立つ日を吉日とぞかいびやくと同義であつて、法會を執行することを本尊に告白する義である。授戒會は初日に開白の式がある。披露。

*がいぶん 涯分先づ鷹巢めを尋出しの時のためぞかし、がいぶん祈つてかの女人も助け(用明天皇) 【涯分】己が力の及ぶ限り。平治物語に「涯分武略を廻し、禁衛無異なるやう成敗仕るべし。」謡曲・道成寺に「あらうれしや、涯分舞を

まひ候べし(合類大節用集言辭門) 涯分、又三種分。 かいまみ 垣間見の念力や通じけん(松風) 【垣間見】のぞき見ること。

かもちひ 神に供ふるかもちひ(源義經) いざ給へ、かもちひめさせんと(兼好) 【挿節】貞丈雜記に、今の牡丹餅のことだといひ、中島廣足は、そばがきのことだといひ、一説に、田舎の萩の餅のことだともいふ。徒然草第二百三十六段に「よさ給へ出雲舞みに、かもちひめさせむ。」

かおもん 兵藤太が發心の一句のかいもん(これなりと用明天皇) 【戒文】佛教にて戒律を記した文。

*かいらう あれ妻戀の牝鹿牝鹿小男鹿が焦れ焦れ、御影の森に鳴く、其かいらうの聲までも、我身の契り何時何時と(松風) 我は秋鹿妻を戀ひ、かいろうと鳴くと知らせたや(歌念佛) 暮れぬ間に故郷へ、かいろうかいると呼ぶ鹿の聲も(五人兄弟) 秋鹿が妻戀ひかれて、かいろうと鳴く(百合舎)

秋は鹿の交尾期で、牝鹿が牝鹿を慕ひて鳴く。その牝鹿の鳴聲に、かいはれにカヒイヨの如く聞えるのを「かいらう(併老) または「からう」とりなした語である。併老は五三三頁の條を見よ。燕居雜話卷之一に「併老家にうたふ長閑といへる曲八朔梅といふが中に、かいろうと啼くは小男鹿の妻に引くるが心からといへるを、わからぬまにかひよと啼くと唄ふべきを詠など云ふ人あり、併言なり、こは燕玉集に、武藏野にかひよと鹿の鳴く

り、こは燕玉集に、武藏野にかひよと鹿の鳴く

頃は尾花なみよる秋の夕暮、とあるによれるにて、直にかひよと呼ぶべきを晋便にてかいろと呼びし者なるべし、假初なる事も博く物に沈んざれば辨得る事はなり難きことなるに、況んや輕傳の幽妖をよと見えてある。古今集、雜部、きのよしひとの歌に、「あきの野に妻なき鹿の年を經てなぞわが戀のかひよとぞなく」とありて、鹿の鳴聲を古くは「かひよ」といつたものである。

***かいらぎ** 若衆出立のめせき笠、金鯉かいらぎくわんぬきざし(女護扇)

「梅花散」合類節用集に、「柳華皮」とある。地粒に「花散」あり、刀柳の柄を巻くに用ゐる。黒川道祐撰、雍州府志・七、土庫門下、服器部に、「凡鯉魚皮、阿蘭人麩、米長崎港京師二條商賣行買之、蹄三條店、浸水數日、而繼細割竹尺許、以三麻苧結束之、是稱細竹、以是洗鯉皮於水中、則其色潔白、其磯阿狀大而其姓相齊者性三刀柄、是謂柄鯉、又姓間交、花點狀者謂柄花鯉。」

かいら 「かいらし」を見よ。

かいきつくる 「かいかつくる」を見よ。

かう 親方賭博うち、よみとかうとに屋財家財負けほうけ(大織冠) 斯くてかうの場に至りて座中を見れば(大織冠)

雅句語(〇) 合の義、加留多の繪紋の同類を合すをいふ。黒川道祐撰、雍州府志・七、土庫門下、賀留多の條に、「其扱之(加留多)之法、其始三人或五人圍坐、其内一人左手取、持賀留多以裏面上下追離不見其裏、配分而置、各々之前、是謂切賀留多、其傳戲謂打賀留多、然後入々所傳之札數二二三次第、早

拂盡所待之札、是爲勝、是謂讀、俗每事算之謂讀、又五所得之札、合其紋之同者、其紋無相同者爲負、是謂合言合其紋之義也、或又謂加守。

***かうい** 女子と生れし此因果は女御更衣になる(夕霧)

「更衣」昔時後宮の女官にて、天子の御衣を更へることを司つたのであるが、後には御聲に侍したこともある、位は女御の下である。

***かうがいわげ** ばれ元結のかがいわけ二十を頭に十人許り(嵯峨天皇)

「笄鬘」のめぐりに髪を笄付けた結方(女用訓蒙國彙(貞享四年刊)卷三)「笄鬘は、下げ髪に奉公人など其勤仕舞、うちうちの局なげ髪は身持むろかし、又は各自打寄る頃、下髪に、くるくると廻して、髪にて假に締め置きたるなり、其様面白して何時しか常の結び振になりたるなり、末の世には下げ髪せぬ人がらも、なべて笄鬘にするなり、昔は遊女が、下髪したるとかや。」「撥元結の笄鬘」とは、金紙などの中に針金を入れて作つた元結の端の飾がついた笄鬘。



***かうかう** 流れにつれてかうかうと、間近く爰に鐘の聲(井筒) あれ寺寺の鐘の聲、かうかう斯うして何時までか(天網鳥)

かうがしやりになる 「かぶがしやりになる」を見よ。

かうがわるい 「こがわるい」を見よ。

「こがわるい」を見よ。

かうき 樗の立木をその儘に枝を打つて、科人のがう木の柱と定めらる(孕常盤)

「樗木」採割するに縛り付ける木。源平盛衰記、成親以下召取る、條に、「松浦太郎高俊樗木にかけて打取め、事の起りを尋ねけり。」

***かうぎ** がうぎがさつを仕つたらば曲事でおちやんべい(丹波與作)

かうくわ たたみかけて左の肩口、膏育まですつげと斬る(浦島)

「膏育」心臓と膈膜との間をいふ。膏は心の下にある微脂を云ふ。左傳、成公十年の條に、「疾不可爲也、在膏之上、膏之下、攻之不可云々。」

***かうけ** 東の高家入間殿より御養子分の約束にて(丹波與作)

***かうざむら** 官軍は郷侍野武士を集めて御勢三百餘騎(井筒)

「郷侍」王者の武士。

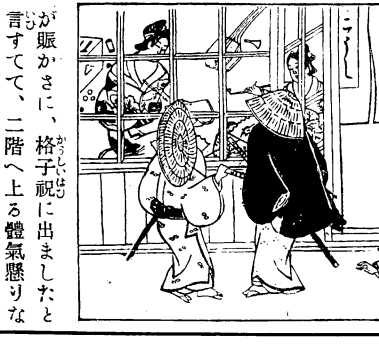
***かうざあもん** 油のついでに油屋の女房殺、酒屋に仕替へて幸左衛門がするげ(女奴)

「幸左衛門」二代竹島幸左衛門をいふ。大阪の

名優にして立役を勤め、位付上七吉三昇り、享保四年初番より大阪吉左衛門町(道頓堀)中座の座本となつた。彼者念此世(享保四年刊)立役之部に「上々吉、竹島幸左衛門(座本)先以て久振りにこの座本、きぞおうれしうござんしよ、取分付願見世の大筋り、ほんに藝をなさる、所きへなかつた、おやぢさんの七年に末末本致すとのお悦の口上、諸見物へよ當りました、授藝評は皆さん御存知なれば今更いふも古事、難波のため、外につく人がないぞ云々(凱陣八島)

***かうざんせ** (凱陣八島)

***かうし** 格子へお出でなされてより、去年の今日まで(夕霧) かうしへ出でしと聞きし故、よれ振見たり思ひしに(本領實致、あんまりよそ(人倫訓蒙國彙所載)) (格子)



れば(重井筒) さもしい金に氣が觸れた見世女郎のあさましさと、世間の唱へ傍輩の掃部殿を始めとして、格子女郎衆の手前もあり(冥途飛脚)

「格子」遊里の眞層即ち女郎屋の表作は格子に於つてゐるにより、女郎屋を格子といふ。「格子祝」とは、遊女が格子の内に出張つてあつても客無き時、客があればよむに思つて近邊などを散歩すること。雨水漫遊に「信家の女郎に格子祝といふ事をなすは、馴染の客も知る知らぬ客の呼出しもなすて、淋しき夜は近邊などをちよと歩けば、必ずその夜に客來るとして、往昔の女郎は、かゝる事をなしたりと見えて云々」。

「格子女郎」とは、格子の内に出張つて客を招く遊女で、木夫、天神よりも下位の者を云ひ、又は天神をいふこともある。西遊興志傳、御前職經記(正徳二年刊)卷之一、傾城の因縁の條に、天神は木夫より少し劣れり、禰名に三尺といふ、和名に梅といふ、唐語に天職、俗語に中位とも、宗とも、むらとも、格子ともいふて、

「がうしや」(綺紗)を見よ。
「がうじや」
「がうじや」(恒沙)を見よ。
かうじゆ・せいきん まうしやうせ いしも面を恥ぢ、かうじゆせいきん袂を翳す(伊豆日記)
「綺紗(綺紗)綺紗も共に支那上代の美女である。遊仙窟に「綺紗青琴對之羞死」とありて、註に「綺紗者古美、妾也、青琴古神女也」。

庚申甲子一夜の間日もある事か、身が燃えかへると泣きわめく(大職冠) 來月の庚申も取越したいとの呟き(薩摩歌)

「庚申」この干支に當る日は房事を忌む、庚申の夜に男女交接して生れる子は盗人となつといふ俗傳がある。東海道名所記に「庚申の夜に生れたる子は盗魂の封にあたる故に、成長して必ず子を盗るなり」といへり。江島長嶺撰、風流曲三味線(寶永年間刊)二之卷、長島様の彈引出物の條に「昔皇帝に素女といふ助州の教へて、庚申甲子に交りて戒めしより、今に傳へて庚申の夜交し、其夜やどりし子は成人して盗人になるといふ傳へしは、猿猴に生るゝと手の長いといふ傳によりて、盗人に生るゝとは甲傳ふれど、さらさらさうでなし、先づ庚申の夜にまじりし子、男子なれば盜の深き習問と生れ、女なれば風呂屋者になり、これ申の日に生る、故ればやうに揮付きたがる習問持となり、又風呂屋の癩ほどに、いかげんなるる簡甲子にとまじりし子、女子なれば清水辰橋前前の遊女となりて、人を見かければ罵詈雑言を致すか、さなくば寺方に、胸を掻きつけて大黒と呼ばれぬ云々」云かのえさるるをも見よ。

また庚申待の略。庚申の日に六回あつて、背面全剛の縁日である。黒川道祐編日女紀事(延寶年間成)正月の條に「六庚申夜亦被供、酒菓於背面全剛、入り夜賜飲食於殿中男女、則被催御遊、諸家亦多有祈禱、俗間亦獻七種菓、供饗酒而祭之、相傳庚申背面全剛の縁日也、故如此、朋友相聚、多喫、亦小豆粥、宴遊到、鶴鳴、而止、是謂庚申待、此日詣粟田口三徳堂及八坂庚申堂、庚申堂天王寺所、有爲木、凡一年中六庚申日、始終兩度特受詣多」。

かうしん 怒れる涙ばらばらと蛟人が玉を貫けり(用明天皇)
「蛟人」人魚である。蛟人が玉を貫くとは、蛟人が玉の涙を流すをいふ。通異記、卷下に「南海中有蛟人魚、水居如魚、不履機織、其眼泣則出珠」。鶯曲合浦に、「蛟人涙に玉をなして」。

かうたう 「こらたら」を見よ。
かうぢのはな びんびんの麴の花、ちろちろ眼にて立歸り(大經師) 瓢箪傾け注ぎかくる、酒にはあらぬ麴の色、花の一步のからから(生玉) 麴の花麴の花は麴で釀す故に花は眞白で、銀色であるから銀貨のことというたのである。

*かうのとの 可憐の有様や、かうの殿のましまして世が世ならば、供人よ馬よ興よといふべきに(烏帽子折)
「かみのとの(頭殿)の普便。源義朝は左馬頭であつたから頭殿といふ。

*かうばり かうばりが強うていよいよ心が直らぬと(女殺)
正しくは「かうばり」(勾張)又は「かふばり」(甲張)であつて、強張と書くは當字。家などを支へ張る材をいひ轉じて剛愎であつて服従心なきこと。世話話にかふ張強うて家を倒す。

かうばん 奥へ行き香盤の火を取つて來ませうと(心二河白蓮)
「香盤」灰に數條の連なれる溝を作り、抹香を填して薫らし置く方形の香盤。
かうぶし 町人參や香ぶし方の奉公は不案内(薩摩歌) 香附子などにて血を開き(冷泉節)



「香附子はまきげ」 [しぶらか]

*かうぶんぼく 抑此梅は唐の帝の御宇、天下文學盛んにして萬民太平を稱へし時、諸木に勝れ花の色香を増したる故好文木と名付け(天神記)
「好文木」梅の異名。十訓抄、可存、東宮藤直宮一事の條に「唐國の帝文を好み給ひければ開き、學問意り給へば散らしをれる梅ありけり、好文木とぞいひける」。人見幽軒の東見記(上卷)に「梅云好文木」故事、在昔起居註、晋武好文明施開、廢學則推不開云々。

かうらん 「かうらわら(膏脣)の誤。その條を見よ。
*かうらん 「后も井筒も心空におそろしく、おつおつ立出で勾欄より見れば(井筒)
「勾欄」官殿・橋・廊下などに作れる欄干をいふ。その端長刀形に反つてゐれば勾欄といふ。勾欄は高欄とも書いてある。

*かうりよう 鳳凰其樹に巢ひ、蛟龍其池に遊び、麒麟其園に到る(國性爺後日)
「蛟龍」みづち。水中に潜み、雲霧に際會すれ

かうりん

は天上するといふ。
「くわうりんを見よ。」

***かか** お清は六つ中娘、かか様ぶぶが呑みたい(女殺) 観川の天満屋の初めとやらと腐合ひ、かかが姪を嫌ふよな(曾根崎) かかが出花の相場が何時三百日に極つた(孕驚驚) あれば我等にあまえるの、腹立つ所がなほ(女腹切)

「囃」小兒が母を呼ぶ語である。轉じて、我妻を呼ぶに囃といひ、また他家の主婦を親んで呼ぶにも用ゐる、但中流以下に用ゐられる語である。序に云小兒は舌がよくまはらぬば、一語の首音を講らせて言ふのが多い。母を「かか」と呼ぶ、父を「かか」と呼ぶ、水を「かか」と呼ぶ、神を「かか」と呼ぶ、麻を「かか」と呼ぶ、衣を「かか」と呼ぶ、尿を「かか」と呼ぶ、坐るを「かか」と呼ぶなどはこの類の語で、これ等皆吳林子の文中に見える語である。

かが 加賀一匹且那の名だいで買ひかか(會根崎)

***かか** 其方の官加階某執奏申す(三世相)

かがが ああどうかせう何とかが笠、お吉と見るより地獄の地藏(女殺) お墓へちよつと加賀笠(國屋歌)

かうりん **かがみ**

る、加賀國から産出したのを珍重したのでこの名がある。足利義満記に「婦人の菅笠を被りしは延寶の頃より起りしなるべし、當時の人加賀の國より出るものを好みし故に、加賀笠と書けるもの多かるる。」
歌、我衣に「天和の比より加賀笠大名衆女のかむりものなり、前を竹にて止めたり、寶永末よりふちを針金にて止る、上綱よりも出ず、天和頃は内を着にて半分ふたり、正徳より内一ぱいにく、絹糸ぬききれなり」。



かがか あかうの胴にかがが、くれ紅の調べを千鳥がげにかけさせ(靈女)

「加賀革張を張る革で加賀はその名産地である。和漢三才圖會に載せ云へる條に「以馬皮一張之、出於賀州皮最佳」とある。但し小鼓を張るには鹿皮を佳品とする。」

かがが 大振袖の後帯(卯月潤色)

かがが 月の入りより降る雨に、かかせの簀笠身纏ひ(川中島)

「二がし(熊の義で、田畑を荒す猪鹿の來ぬために、それらの獸の躰や肉などを焦し焼べるよりいふ。一説に鹿鹿の肉で、猪鹿の躰ふ肉などを焼べて合し鹿鹿かしめるより云ふと)轉じて、鳥獸を防ぐ爲に田畑に簀笠姿の真人形を立てたものをかかせまたはかかせ

し(案山子といふ。狂言、瓜盜人に「今夜は某がかかせになつてとらやう」)

かがが 袂に残る加賀染の、うつりやつと(加賀) 杖に染らじ紋(龜大臣)

かがが 眼はかがち(振袖始)

かがが けつし所へ百鳥(かかつし所)

かがが おれま(ござん)後付(なかつた)

かがが よれ様に(ごん)ばい

かが、やあそれも大事か、かがのごんばといふ事あり(淀屋)

かがが かかへを手繰り寄せ(天網魚)

かがが あさましや淺黄染、かかれとて(抱帯)

かがが それ鏡突抜け、まつかせと踏みつくれば、底も鏡もすつぱり(鏡権三)

「稱梅の蓋をいひ、圓形で古鏡に似てゐるよりの名。



かがみ 先づ恵方糊神の糊、鏡とるとるやり手衆の、かほにとり粉の面白いとて(分鏡)

【鏡】おかみを見よ。

かがみくら 馬追蟲にかがみ鞍、鏡踏張り名乗るべき大將軍とぞ見えにける(孕常盤)

かがみのいへ 嫁入先は夫の家、里の住家も親の家、かがみの家の家ならで、家といふものなけれど(女殺)

かがみびらき 【鏡】鏡匣をいふ。抱狩郷本地に「鏡は女の魂、武士の太刀かたな」とある如く、鏡は女の魂で、鏡匣は女の魂のある家と見立てたのである。この文は、女の家と見立てたのけては我が家といふもの無けれどもの意

かがみ 女の魂、武士の太刀かたな」とある如く、鏡は女の魂で、鏡匣は女の魂のある家と見立てたのである。この文は、女の家と見立てたのけては我が家といふもの無けれどもの意

かがみ 女の魂、武士の太刀かたな」とある如く、鏡は女の魂で、鏡匣は女の魂のある家と見立てたのである。この文は、女の家と見立てたのけては我が家といふもの無けれどもの意

かがみ 女の魂、武士の太刀かたな」とある如く、鏡は女の魂で、鏡匣は女の魂のある家と見立てたのである。この文は、女の家と見立てたのけては我が家といふもの無けれどもの意

かがみ 女の魂、武士の太刀かたな」とある如く、鏡は女の魂で、鏡匣は女の魂のある家と見立てたのである。この文は、女の家と見立てたのけては我が家といふもの無けれどもの意

め葉をすかして、かゝりあれと植を置きし。かかりゆ すふふもしやんしやん、かかり湯取つてかげん見(丹波與作)

かき 賈誼が長沙に遷され(大鑑冠)

かきあみ 常陸小秋も夫ゆる、身を旅籠屋の水棚の、はしに目鼻のがきあみを、夫とは更にしら絲の縁はきたなき土車(反魂香) 力は地獄のがきあみ、御壽命は朝顔の日影待つ間の露の身(孕常盤) こりやがきあみも同然ながら、邪法一味の方人等斬盡さんと立ちかかれ(蛙合懸)

かきだつ 荷物を船へ積む折柄、乗合の京の奴かきだつより額差出し(博多)

かきつばた かの紫のゆかり求めて杜若、三河の國に御陣を召され(冷泉節)

かきまづ 施主書したる銀金を残らず取つて搔抱き、袖より漏るるを搔まつ(賀古教信)

かきもち 人の情を掛鯛の、むしり看と春めかす、そのかき餅の水より、涙の水とけやらぬ(水明日)

かきこん 双方理詰の高聲、雑色格勤鐵棒鳴し、鎮まれ鎮まれ(岡田川)

かきつばた かの紫のゆかり求めて杜若、三河の國に御陣を召され(冷泉節)

かきのころも 先達の装束借つて着用し、柿の衣に黒腰巾、十二因縁の袷をたたみし兜巾を懸け(二心五戒魂) 妙法坊かき衣をかなぐり棄てつ(遊樂の無敵の衣である、山伏の服で正先達の位者これを著る)

かきは 常磐堅磐のまさ木のかつら(鎌田)

かきほ 人鷹のかきほの柿、山邊のかき小栗(文武五人男) 垣穂に残る卯の花(虎が懸)

かきまづ 施主書したる銀金を残らず取つて搔抱き、袖より漏るるを搔まつ(賀古教信)

かきもち 人の情を掛鯛の、むしり看と春めかす、そのかき餅の水より、涙の水とけやらぬ(水明日)

かきこん 双方理詰の高聲、雑色格勤鐵棒鳴し、鎮まれ鎮まれ(岡田川)

かきこん 双方理詰の高聲、雑色格勤鐵棒鳴し、鎮まれ鎮まれ(岡田川)

之鏡餅、以刀截食之、是稱明鏡、又謂祝之鏡餅、至甲冑、願殺之詞、故以手破餅、缺一片食之、故是謂缺餅、於今一切稱缺餅、四山安養寺并雙林寺、鎌山正法寺僧、號常盤餅、餅是餅三片圓、乘半乾三寸許、薄切之、除乾以文火、遠焙之、而後餅、餅內、每有寶客、供之、凡家々、總雖有之、不置及三寺之製(文々)

大板及中國地方では水餅と稱する所がある。大板の遊師では、六月朔日は正月納め終日として、遊女は天王寺、勝曼寺をなし、また遊客をもてなすに先づ酒と共に缺餅を出したるものである。難波饗延寶八年刊に「勝曼寺并水餅之傳」とあるも、これである。現今でも関西地方の香櫃、旅館にて、酒のあしらひに最初に缺餅を出すも餘習である。

かき 權三が馬は逸物の、口を切つて角を入れ、ハウツとかけたる聲の内、一さんにかけ出す(龜權三) 鞭打ちくられてかくを出入、雲を霞に飛ばせける(百日負我)

【鉸具角と書くは當字である。貞丈雜記卷之十三、馬具之部に「力能にカク」と云ふ所あり、鏡の頭に細きかねありて力能(釜通す、其細き金をサスカカとウツオカネとも云ふ、又ヒヂカネとも力金とも云ふ、又カクと云ふなり、カクノ事をカクとも云ふ、……カクノ事をヒヂヨカネともヒドワガネとも云ふなり、カクコといふ字、鉸具の二字を用い來れり、……本はカクなれども、クとコと五音通ずる故カクとも云ふなり。】

【鉸具を入るとは、馬を進めようとする時、鏡の鉸具で馬の脇腹を顧るをいふ。なほ鏡權三この文に「口を切つて」の切は放つ義、馬を馳らす時手綱を弛ゆるをいふ。】

かきこん 双方理詰の高聲、雑色格勤鐵棒鳴し、鎮まれ鎮まれ(岡田川)

かきこん 双方理詰の高聲、雑色格勤鐵棒鳴し、鎮まれ鎮まれ(岡田川)

かきこん 双方理詰の高聲、雑色格勤鐵棒鳴し、鎮まれ鎮まれ(岡田川)

もの。堀保巳一編、武家名目抄稱、職名部附録十下に「按、格勤はすなはち宿直勤仕の人をいへり、常に番衆といふが如し、然れどもこの格勤と稱する輩は、庶士の尤下等なるものなれば、番衆といはずして格勤を以て名とせり、後に名を改めて御末衆といへるも、又その末席にあるを以てなり、鎌倉御所に中居殿原とよばるゝも、土と中間の間に居る士分のものなる故なり、後世にいふ中小姓歩行衆などいふは即ちこの格勤なり」。

かくしめつけ 頼朝大きに御氣色損

者ども皆に耳へ達したり(倉橋小) [隠目附]目附は、監察のつかさであつて、非常を按察し事状を具して君長に密告する職である。隠目附はもと、忍目附といはれたもので、忍んで事情を探偵して君長に報する役。武家名目抄、職名部三十四上に「按、忍目附は常に定置かる、一職の名にはあらず、なべての目附にもあれ、歩中問小人の目附、又は近臣忍組等の者にもあれ、主家の命を受けて他方に潜行し、其地の形勢を探り得て反告をなす者をいへり、近臣にてこの此役にさき、ことばは、主人より直に命ぜらるゝに便あればなるべし、もとより人に悟り得られざるを旨とするが故に、商賈のさまにまねび虚無僧放下の形をもちりなどして他國に赴くならひなり、されば人にも知られたるなべての目附職たる者、これを役するは少く、大かたは徒立の輩なりと見えたり、後の世かくし目附又は隠密などいふもの皆此流なり」。

かくちろん 大成論、格致論(冷泉節)

〔格致論〕漢方の醫書である。格致論は元朱羅亨撰、日本版のものもある。格致論は明萬全撰、明版も元禄八年刊の本邦版のものもある。

かくなわ 蜘蛛かくなわ十文ざり

の茶碗に一ばい、酒でも餅でもう

かくしめつけ——かげごころ

まい物のせい揃(女揃)心ばくもかくなわや、十文色もでてくるわ(冥途飛脚) 蜘蛛かくなわ十文字、割立て追廻し(反魂香)

〔結果経など結び、又はひねりたるやうな形をいふ。和名抄に「結果、形如結び、此間亦有之、今案加久乃結果、近世風俗悉(原名)守貞遺稿下巻、盒類の部に、かくなわといふ菓子」



平家物語巻四、合戦の條に「蜘蛛手かくなわ十文字、蜘蛛返車、八方透さす斬りたけり」とある。吉野郡女揃、冥途飛脚の二の文は、蜘蛛手かくなわ十文字といふ詞があるので、それを十文ざり「十文色」を云ふに用いたまふのである。

かぐら 橋上大衆のやの云々を見よ。

隠養隠笠があら欲しやと(博多) 何處所(生玉) 著れば身を隠すといふ義及笠の拾遺集、雜貨部に「隠養隠笠をも得てしかな、來り人に知られざるべく。保元物語、爲朝鬼が島渡りの條に「汝等は鬼の子孫か、さん候、さては聞ゆる賢あらば取出せ、見んと候へば、昔正しく鬼神なりし時は、隠養隠笠浮腫ぬなどいふ賢あり云々」。

かくれん坊 こなさんたち騙して

隠れん坊したればつい探し出された(生玉) 「かくれん坊(隠坊)の語、小兒遊戯の名、小兒多く集りてその中の一を選り、鬼と名づけて目を閉ぢ、他の小兒等が隠れ終へた後、

合圖を待つて之を搜索す、最初に搜出されたもの次回の鬼となる。

かくるふ 五重の塔の雲水に月の光のかくろひて(大冠鑑)

「かくる(隠)の延びた語で「うつろ(移)をうつろふ」と同じ類である。

かぐわう・ちよよい 娥皇女英の古

も君が別れを悲しみの(吉野忠信) 「娥皇女英支那帝堯の女で、姉を娥皇妹を女英といふ。堯の二女を舜に與ふ舜位に即くに及び、娥皇を皇后とし、女英を妃とした。舜蒼梧で崩じたので、二妃も赤湘江の間に死んだ。湘君と稱するもの即ちこの女である。

かけ 四筋の町の軒深く、燈火星の

如くにて、三五以上の月の顔、さす汐影のわけもなき、局局の手拭は濡れぬ隙こそなかりけり(露門松) 「影」下位の遊女であつて、もと勤銀二匁程であつたからの稱で、見世女郎、端傾城、端女郎などはこれ等の傾城をいふのである。よしは「しちごころう」をも見よ。

かけ 鹿毛なる馬に打乗つて(松風)

かけかすげ 殿の御馬はさび月毛連

〔鹿毛〕鹿の毛色の名、鹿毛に黒白の雜毛のあるもの。 〔鹿毛〕鹿の毛色の名、鹿毛に黒白の雜毛のあるもの。 〔鹿毛〕鹿の毛色の名、鹿毛に黒白の雜毛のあるもの。

ら、飛こくら、駈こくら、輕技、早技劣ることばなけれど唐船歌 「かけこくらへ(飯事獲)の略。獲走。

かけすぶり 懸硯の鍵出し、引出あ

けて(二枚巻) 猫も直打ににやん 匂、五分と飛んで時鳥、守本尊懸硯、鐵葉童も罷出で(博多) 「懸硯、懸子のある硯指で、引出の附いてあるもの。博多小女郎波枕のこの文は、飛ぶの縁で時鳥とつづけ、ほそんかけ九か時鳥(その條を見よ)の句を用ゐて、守本尊懸硯といふたのである。

かけたて 互に心懸袖の、縁により

糸括り袖(薩摩歌) 「懸袖」袖と袖とを懸け合ふこと。この文は、互に想を懸け、袖と袖とを懸け合せて拍付いたことをいふ。

かけだいい 若えびすに掛鯛、蜜柑柑

子橋(露門松) 「掛鯛」昔時、正月の儀式に二つの鹽鯛を煮縄で結び合せて、日本松を繩の上に掛けた。これを掛鯛といふ。門松元祿巻二「世界の借屋大將の條に「掛鯛を六月まで荒神の上に置きなすはとある。今も上方關西地方で、新年の注連飾りや籠の上に掛鯛を使用する者がある。

かけち 岩のかけ路をつたひ下

かけづくり 神崎一番の大揚屋、かけ

作りりの長表まで迎に出で(賀古教信) 「懸作」山た崖に待たせ懸り、或は川の上に懸渡して作った家。 かけごころう 油煙につれてくるくると廻燈籠、影燈籠、月も更け行く夜嵐に(編山遊)

〔影籠籠 廻籠籠をいふ。増補俳言彙集〕「かげ籠籠」紙にてはりし籠籠の中に、人形のかたなきりぬきたるを入れ、廻る様にしかけて、其影を紙にうつし出して玩物とす、走馬燈なり。

かけどく 朋輩どもとかけどくに道中雙六打つて、沓の錢ほどしてこまぜうと思つたに(舟波與作)

「かげろく(賭祿・懸祿)の詠つた語博奕などの勝負事に物を賭けること。狂言・薙に「かげろくには何を賭ぞ。大矢敷(顯密)に西鶴大矢敷第三十六に「かげろくをして又行は夜の風。分里靴行脚(正徳六年刊)四之巻に「勸當させたらば此身を自由にしてやるべしとの賭祿云々」とありて「賭祿に「かけどく」と傍訓してある。

かけなげ (酒呑童子)

〔掛投〕相撲の手の名、掛け手で相手を投倒す手といふ。

*かけのわづらひ 比良の嶽にて木を伐つたる天狗の祟、行房には當らず我妹に取付いて影の煩ひ(畠田川) 不思議や赤染衛門、相も變らぬ姿にて二人立入り、…兼盛夫婦呆れて、これは何たる報そや影のやまひといふものか(赤染衛門)

〔影類〕形病ともいふ。一人の者が一人は本人一は變化のわざで、同じ姿の二人となつて見える婦人病。

かけはん 本膳の懸盤に種種の魚(鳥川中屋)

〔懸盤〕賣人の膳具に用いた物で、後世のは足を作附したども、昔のは足と折敷と別々で、四本足の臺上に折敷を載せるやうにしてある。

かけはんがい 知行潰しの米糺飯糺

かけはんがい、片に足らぬ中は空との明きばんがい(會橋山)

「かけばんだら(懸盤)に「はんがや(糺盤)をいひかけたのである。懸盤は懸盤の折敷を取去つたもの前像を見よ。

かけんかつら 御骨なりとも拾はん(懸盤)髪を附けた男鬘の臺を懸ける事

影もささす 生駒新五左が瘧も妙薬一服で、影もささす落馬致す(鐘屋三)

佛も映らぬ程早い意。この文は瘧があとかたもなく早く癒えたこといひ、また瘧の癒えるを落ちるといふから、その縁で落馬と書きつづけたのである。

*かげろふ 上段下段の太刀捌き、陽炎稻妻獅子奮迅(國性爺)

「かげろひ(陽炎)の轉。うら、かな春日に燃え立つやうに見える氣即ちいとゆふを云ふ。轉じて、それと姿は見えて現へられない動作の敏捷なことにいふ。新曲・熊坂に「追つかけ追つ、めくらんとすれども、陽炎稻妻水の月かや、姿は見れども手に取られず。

*かげろふ 身はかげろふのうき命うき命、暮るるや限りなるら(百日奇談)

〔浮遊〕昆蟲類中、脈翅類に屬する小蟲の名。浮遊は卵に生れて暮に死すといへば「暮る、や限りなるらん」と書いて、曾我兄弟のはかなき命に喩へたのである。浮遊古又遺物後集、前赤籠籠中の浮遊の註に「浮遊。小蟲名、集略、朝生暮死。

*かけあはし 高き位やかけあはし(用明天皇)

腰につけた懸鳥帽

子に降來る雨を受留めて(會橋山)

〔懸鳥帽子〕打懸鳥帽子のこと。貞丈雜記・卷三に「古打かけあはしと云ふは、折あはしを小結もて、うづかけもかけずして頭におし入れて、後の針はかりにてとめ置かむといふなり、これ無禮の體なり云々。

*かこひ すがのくるわ駕籠きれて、雪駄片足の酔潰れ(徒舞) そんなら道ぢや駕籠へもちよつと寄つてくれ(重井筒) これがほんの犬骨折つて、綱に取られたお侍と、笑うて駕籠籠工、有馬の宿へぞ歸りける(百合若)

〔駕籠〕昇籠の義であらう。四季草に「駕籠はそのもと竹を以て編み作る故の名なるべし、又あんだといふ物あり、あんぼつとも山駕籠ともいふ、それに意巧を加へて駕籠は出来なるべし」と見えてゐる。和訓栞に「駕籠を圍むの義」としたるに從はず。

「駕籠きれば駕籠が皆出て無くなつてゐるをいふ。きればは品切れなどいふ「切れ」である。

「駕籠へもちよつと寄つてくれれば「駕籠屋へもちよつと寄つてくれ」の略。

〔駕籠細工有馬〕駕籠に籠籠工をいひかけ、籠籠細工は有馬の名物なれば、有馬の宿とつづけたのである。海陽群談・卷第十六、名物土産の部に「同(湯山)籠籠細工。向所(有馬郡有馬湯元)にあり、花生・果盆・輕草入・盆・水瀝琴、凡て籠を用ふるの器物好て令造之。

*かこひ 此誓紙灰になせとば曲もなやとかこひ給(ば)(蝶々)

「かりこ(假言)の義で、かこつけていふこととなるが轉じて、歌、危言をいふ。

*かこひのとり 籠の鳥なる梅川に、焦れて通ふ里雀(冥途飛脚)

〔籠鳥籠の鳥の如くに身の自由ならぬをいひ、遊女は身を抱主に賣つて自由ならぬをいひ、昔から籠の鳥に喩ふ。借酒盤神歌にも「逢ひたき見たきは飛びたつばかり、籠の鳥かやうらめしや。

*かこひ 一家の太夫・天神・鹿懸・葛城様さらばや(反魂香) 百に餘りてかこひ・端、二百餘人の玉鬘(酒呑童子)

(百人女郎品定所歌)

〔團扇懸と書くは當字である。天神(遊女の位である、その條を見よ)の次位にある遊女であつて、六夫に附隨する者を引舟といふ。團の名義にて就ては、この遊女の場代十四女または十五女であつたからの稱である。當時流行したためくり骨牌にて、十四・十五の歌は八に



(畫 信 祐 川 西) [懸 鹿]

見られないやうに隠ひ隠すものなれば、その縁で十四夕・十五夕女郎を圖といふたのである。貞享・元禄頃では、この遊女の揚代十八夕に上つてあれども、なほ舊稱の隠に圖と稱するるのである。西鶴の好色一代女(貞享三年刊)に「十五」と書いて「かこひ」と傍訓してあるものこのわけである。めくり、傍訓では十の歌は等として歌に加へず、九を以て最上の歌とする、九でなくとも親の札より一つでも多ければ則ち勝ちとする。四以下の歌なる時は更に一枚の札を得てその歌を多からせうとする。十四また十五の歌は十は歌に加へぬにやうり、四または五であるので相手に見せぬやうに隠ひ隠すのである。山崎美成撰、鳴鶴故人傳、増補博覧照に「節亭主人云、此キンゴ打つときに、例へば十四の歌出ればこれをふせ置くなり、それを其徒の言葉に圖といふ故、十四夕の遊女を其頃カコヒ女郎といへり。後にはカルタの打やう巧者になり、十一にても十二にてもかこひやうになり、遊女も價高くなりて十五夕になれば、カコヒの名も何のわけやう知れぬやうになり行きし也。」

人倫訓蒙詞彙に「鹿懸。よろづ天神様より一際鹿相に拜まれ給ふ。御前義經記(正徳二年刊)巻一、傾城の因縁の條に「鹿懸。天神より又一段さがりて、一尺八寸とも、鹿懸とも、追懸とも、八寸とも、女の子とも、鹿とも、太夫に附くを引舟とも、つきものとも、太鼓女郎などいふはこのたぐひぞかし」云々をみるべし。

かこひ 雨の晴間の夕日影、にじり上りの一間よりかこひに入らせ給ひつ(用文章)

かこひ 燈し油さへ高直の世の中、

我が親の脂かこひばさせぬとぼつかくる(嵯峨天皇)

かこひ 茶を煮て旅人を呼掛け、これ申しお茶さめられ、駕籠やりませう駕籠やるといへども(西玉母)

かこひ 駕籠やるといへども(西玉母)廓は戀の晝中や、駕籠やりませうぞ寝聲なり(流懸) 駕籠やりませう上臈様、駕籠やるといへども申しける(百合若)

かこひ 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母)

かこひ 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母)

かこひ 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母)

かこひ 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母)

かこひ 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母)

かこひ 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母)

かこひ 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母)

かこひ 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母)

かこひ 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母)

かこひ 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母)

かこひ 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母)

かこひ 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母)

かこひ 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母)

かこひ 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母)

かこひ 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母)

かこひ 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母)

かこひ 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母)

かこひ 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母)

かこひ 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母)

かこひ 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母)

かこひ 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母) 駕籠やるといへども(西玉母)

これを以て宮雀のすきはひととなして、よいかげんにあらぬ事までたくみなして黒夫愚婦をたづからかすとかや、了簡して聞かべし。鹿島名勝園繪下巻に、「事觸り古は禰宜のうち中部の家あまたありて、年中の吉凶を卜ひて朝廷に奏聞せしとなり、……か、る卜法は今は(人倫訓蒙圖彙所載)



【觸事島鹿】

絶えてなき古き事なるを、今の世の中に事觸と稱へて年の吉凶をいひ、何くれの虚言などいふは、かの上代の風を傳りまねびたるよまひなり、この事觸といへるもの鹿島よりはふつと出でず、皆賤しき乞食どものしわざにこそ。山路の四段目云々といへるは、用明天皇臨人總第四に見えてある文である。

***かしましい** 梅龍内よりつこと聲、かしましい何者ぢや(大經師)
 【意】かまびすし。喧し。合類大節用集(享保二年刊)に、「驚(おどろ)かしましい」

かしまつ 韃靼王の臺所につくばひ、かしまつ水でも暖つて命をつけとぞ呼ばはりける(國性爺)
 【意】水もまた暖まらぬ水。
***かしまつ** 罪業の程思はれて、呵責

かしましい——かせじよたい

恐し鬼踊の(生玉) 跡よりやり手の責めくるば、呵責の責よりなほつらく(夕霧)

【呵責】地獄にて獄卒より受ける責苦。合類大節用集(享保二年刊)に、「呵責(あへ責)」。
がじゆつ それより心に 我亦を張り、よしや浮世は陳皮の皮(薩摩歌)

【我亦】藥草の名、根は生薑の如く、十月頃採りて類の藥を製す。この文は、我を張るを藥草の我亦にいひかけたのである。
かしらがつ ああ氣が勞れてかしらがつ、母様のお文も見たし、ちとここで休みたい(永明日)

【頭打】頭痛がする。
かしらはり 折合ふ兵頭はりに逃足強く、一人も手に立つ者候はず(倉橋出)

【頭張】最初はかり強いこと。
***かす** 客業客業の揚語を貸すの貰ふの暇無き(生玉) おてき様の待合ひ、我等が座敷へも少し賃して下さされか(金屋) こなさんの顔が見たさに貸しに來たと、入るさの門の障子戸も(冥途飛脚)

【貸】妓より揚屋また茶屋に行くをいひ、又既に揚げられてある妓が他の客席に出るをいふ。貸すは身を貸す義である。貸すの反對に「借る」といふ語もある、これは遊客をして相方の妓を見立てさす爲、揚屋また茶屋から妓を招寄すのを妓を借るといふ。俳諧通言(言語の部に)「太夫借。揚屋にて家々の太夫を一組宛呼寄せ、盆をさするうち客相方を見立てり。中居帳を抑へ、太夫の名をいうてひとづつ呼出し盆をさする。是を太夫かりと云ふなり。」

***かす** 總じてお鹿島と申すには、上の禰宜が三十三人、中の禰宜が三十三人、糟禰宜が三十三人、合せて九十九人の禰宜用明天皇。ヤアあたかなかなかすりぬ、それ打殺せとどつと寄る(用明天皇)

【糟】禰宜の義。糟禰宜は下等な神職の者。糟わつばは下劣な童子。
かすが いやこれ大黒は我が寺に傳教大師の作もあり、春日の作も安置せり(松風)

【春日】元正の胡の佛工で、南河内郡廣長村春日の地に任んでゐた。その子孫に春日井氏椿文會及其子の椿首顯と云ふ者、共に妙工であつたことが鎌倉志河内志俗説辨に見えてゐる。
かすけ 問夫と云うては大人氣なし、容と云うてはかすけなし(實古教僧)

【糟氣】否味氣。金錢に吝く否味ある客を糟客といふ。かすけなしとは無氣で張合ひなきをいふ。
***かすげ** かすげ馬(扇八景)

【糟毛】馬の毛色の名、白黒雜毛のもの。合類大節用集(享保二年刊)股體門に「本朝俗謂頭白爲糟尾、今按馬之白黒雜毛者、呼爲糟毛之類乎。」
***かすやり** かり鉾數槍手に當るを幸に投げつけ(國性爺)

【數槍】歩卒等に持たせる數多の槍。
かすりぬ ならざかや、この手かの手の枕の酒、雲霞と隔つれど、とくれど同じかすりぬの、水を假なる戯れも(反響香) 加賀に菊酒、

南都にかすりぬ(酒香童子) 奈良の名物美酒數酒は麴が滑くないで温つてゐるから、飛白を微井(その條を見よ)にいひかけたのである。「みそれあられと隔つれど云々」の條を見よ。

かすを によつと出でたる糟尾の贗僧(大經師)

【糟尾】老人の頭髪は黒白半するをいふ。しらがまじり。源平盛衰記に、「木曾打撃して哀れ武藏の鬚別當にやあらん、但其は一年少目に見れば白髮の糟尾に生ひたりしかば、今は殊の外に白髮になりぬらん」。合類大節用集(享保二年刊)股體門に、「本朝俗謂頭白爲糟尾」。

***かせ** 多勢かかつてかせとなり、人にて人をせきふさがれ、同志討友討度な失ひ(女權) 中へ小菊がかせに入り(女殺)

【伽乎足まとい。邪魔。まはり障。】
***かせぐ** 鐵田に濱田は力拔群勞れども、屏風にかせ(柳)を動濁(加行四段活)にした語、保元物語に、暫しは矢にかせがれて潮る様に見えし。

かせくび いふに甲斐なき此高家がかせ首、義貞公の御手にかかり申すこと(女權)

【尊首】かじけ首。貧弱な首。
***かせじよたい** 夫婦も元は都鳥、あるかなきかのかせ所帶(隅田川) 嫁の蘭玉賢女にて家を賄ふかせ世帶(國性爺後日)
 【所帶】かじけ所帶の義。管受生計(かせせたい)管世帯はかせじよたいの轉訛。

かぜのかみ あ彼奴は何者ぢや、風の神か鳥威のやうなさまで、何ぢや喜左衛門に逢ばう(夕霧)

〔風神〕昔時風邪流行した時、風の神を追捕ふとして假面を被き太鼓を打つて来る物賣の一種であつて、多く非人のしたわざである。傾城色三味線(元祿十五年刊)大坂の巻に「茶(人倫訓蒙齋所歌) 〔風〕の神」



碗碗出す高原といふ所に風の神と相住して云々。世間福氣(享保二年刊)巻之六に「高原といふ茶碗焼くあたりに儲なる賤の家借りて、風の神放下師と合住して隠れ居たりしが、人倫訓蒙齋(元祿三年刊)巻七に「風神拂。世間に風氣時行ぬれば、風の神を追捕ふとて、面をかつき太鼓を打つて物を賣ふ」とほれまきとて退屈して、一握の米をばらするなり、語人の頬を己が身に受取り、世間無病なれば彼が儲なし、何にても時行やまひとし、は、副耳をたつるあさましきわざにて、後世こそ

は不便なれ。
*かせぶ 釋迦如來の御弟子阿難、迦葉(麻酔)

〔迦葉〕摩訶迦葉波(Mahāyāsa) マハカシヤバの略。釋尊十大弟子の一人で、釋尊の滅後編纂長となつて王舎城に第一回經典の結果を大成した人である。

*かせん 歌仙の靈魂現れ出で(鶴丸) 〔歌仙〕和歌を詠むに勝れて妙なる人。和歌の大名人。藤原公任の撰んだ三十六歌仙は、神木八人、紀實之、凡河内躬恒、伊勢、大伴家持、山邊赤人、在原業平、遍昭、素性法師、紀友則、藤九大夫、小野小町、藤原兼輔、藤原朝忠、藤原敦基、藤原光原、源公忠、壬生忠孝、齋宮安王鏡子、祭首頸基、藤原敏行、源信明、源宗干、源順、源清正、源重之、藤原興風、清原元輔、坂上是則、藤原元直、大中臣能實、壬生忠見、小大者、藤原仲文、平兼盛、中務。

*かた かのたの好い者の仕合見よ、盃せぬばかりで二十八貫目拾うた(萬年草) 肩の悪い梅川様、いとしばいば川様おひとりにとどめた(冥途飛脚) 望みて去らるる淺ましさ、男も女も曾我家の是程かたの悪さは(會務山)

〔肩〕連。籠耳(貞享四年成)に「運のよむわろき詞にあらず、肩に釋おく商人獨籠舟乗物早より起りたる詞なり。好色萬金丹、巻一に「吉岡は疔癩の如し、二つながら人の肩にあるものから、好き事のみ嫌かず、又悪い事はかきもなぬもの。風流詠手家、巻一、稻村山は血汐の瀧の様に「貧病は疔癩の如し、是非とも人の肩によるべし。」

*かた 勝てばむして十六貫何で済す合點ぢや、かたも無うてはいや

ぢやといふ(舟波與作) 年季の此玉をたつた三百のかたに張つて、既にとどうへ取らるるところを(大徳冠)

かだ おのれ大分の錢を取りながらかだなして働かず、横着ひろぐゆゑにこそ人人にも怪しまれ(出世景清) 旅の疲れの御惱みな、不精者よかた田と、威しの爲に撲つ杖の(隅田川)

〔くわんたい〕(後巻)の約説であらう。擲ること。擲者。かた者とは擲著者の意。狂言・雜劇に「手でするところにかだを申せば、また口でいふ事を申付けるる。同、あかがり、(きやつめ)は常の擲道者でござる程に、又例のかだを申すのでござる。」

*かた 散花音楽伽陀の聲、法の功德ぞ有難き(鏡映天皇) 〔伽陀〕梵語(Gāthā)ガトハシである、譯して頌といひ、偈に同じ(げ)(偈)を見よ。かたいき 扱も金は片いきな、ある處にはあるものか(淀無) 昔より有る所には、銀の、金銀は寶の最上一切世間の望を叶へ、金に優るもの無けれども、かたいきと云ふ癖あつて、無い處には無かりけり(釋迦)

〔片行片方へ行く義。平均を外れて一方へ密る。片着る。]

*かたうど これはかりそめの事でない、外にかたうどあらん(傾城佛屋)

かたかなのき 否でも應でも清十郎は片假名の木の空で此様に手を廣げ(歌念佛)

片假名のきは即ちキで、釋柱を云うたのである。釋柱は長さ二間に五寸角で、上下二角所に横木があつて、其形片假名のキの字に似てゐる。



*かたかま 素槍・片鎌・十文字(堀川波鼓) 〔片鎌〕槍の刃の一方にのみ枝あるものを片鎌といふ。兩旁に枝あるものを兩鎌と云ふ。

*かたぎぬ 茶字の袴に緞肩衣(堀川波鼓) あゝ線の肩衣が孫右衛門様か(冥途飛脚) 〔肩衣〕衣の上に着て、肩から背のみ被ひ、前は襷ばかりで袖がない。前後に半袴を着けたのを、上下に(肩衣半袴)合せて云ふ。娯遊笑覽二上「古書を見るに、肩衣はかり着て帯をしめ、袴を着ざる體あり、賤者の著たることながら、……一向宗門徒の肩衣も似たることながら、その上はさる事もなかりしと見え、古き繪草子どもに彼の宗徒の襟を畫けるに、皆背の上下の服にて、肩衣はかりはおりて着たる體見えず、但延寶三年開版の雜波名所を畫ける處分舟に、肩衣はかり着たるも見えたれど、町人も輕き者のままで、さるべき者は皆上下を着たり、思ふに此宗門のならひ、年中佳節も他に異にこそぞ物をするなれば、なすらへて肩衣ばかりを用ひしは、町家にも殊に賤



〔衣〕

しきよなるべし、か、れば此事浪花より起りしにや。

かたぐ なまなか咎めて、一本かたぐり恥かこより、ハテ彼方から見ると此方からも見て、大様にして居さんせ(二枚繪)

〔擔〕眞珠の意より轉じて、負ける、まあるの意に、大伴厚味(淨瑠璃)に、「利口だする齋藤、一本かたぐさせて貰いませ。」

***かたぐま** 子供設けて二人が連れて、お乳がかたくまおててが日傘、肩で風切の山崎(三門松) 負うた

もいと、抱いたもいと、かたぐまの小女郎がなほほいと、かた(今川了俊) うぶすな腹で好い目を擇び、お乳がかたくま乳人の日傘(西玉母) 千貫枝・筆捨枝や久方の、天つ乙女のかたくま枝や(反魂香)

〔かたぐるま(肩車)に同じ。その條を見よ。増補松の菰葉(寶永七年刊)巻四、ぞんぞんこ踊に「賣うたもいと抱いたもいと、かたぐまの小女郎はなほほとこでなほいと、ぞんぞんこ」かたくま枝は肩車の形をした枝

かたぐるま 姉が手を引き乙は抱く、中ば父親かたぐるまに、法の教も一つは遊山(女親)

〔肩車、かたくま〕も、車は乗せるなり、小兒を肩に乗せ首に跨らせて擔ぐこと。

かたけ 帳面は忘れぬ、旅籠か六かたけ酒が四升五合(丹波興作)

〔片食〕日に三回食事しないで、朝食或は夕食のみなること。一回食ふほどの食事、六片食は食事六回分。

かたぐーかたむ

***かたさま** かた様まゐる花より(女腹切) 荻野と申して御方様の母様の妹分にて候(三世相)

〔方標對稱の敬稱代名詞。そなた様。あなたさま。〕

***かたさむらひ** 馬鹿啓勲のかた侍(電女)

〔啓侍助駈くて馳通のつかぬ武士。かたくな侍。〕

***かたし** 雪蹈かたしに下駄かたし、

〔雪履かたし、片をいふ。片。片方の。對なるもの、一片をいふ。片。片方の。男色大鑑卷七、螢も夜は勤めの尻の條に、「草履預けしもそこせられて、歸るまにかたしかたし取集めて。世間子息氣實(正徳五年刊)卷之二に「形見と遊ることの癖いな羽仁なれば、審かたし外へ散ます。〕

***かたし** 尾花にかたしき女郎敷く袖に御涙(女箱)

〔片敷〕衣の片袖を敷くことで、横臥して獨り寝するをいふ。かたじゆけなんきんのはちまん 太夫こまで送つてか、ええかたじゆけなんきんのばちまん酒には酔はぬ(淀屋)

〔かたじゆけ〕はかたじゆけ(奈の詠)奈なりの「なを」を「南京の鉢にいひつづけ」鉢を八幡にいひかけたのである。八幡は弓矢八幡などいふ八幡で、自誓の詞である。こたの文は、太夫こまで送つてくれたか、きてきて奈い、誓つて神かけて(酒には酔はな」との意。「なんきんのはち」を見よ。

かたす 先へ急ぐば駕籠の足、せめてかたして留めもせず、戀の重荷に小附して三門松 道は一筋駕籠二丁二人思を抱乗せて、打見るよりは肩重く、小川ぢや、そこせい、かたせい、まつかせ杖突坂(博多)

〔肩〕編織の袴を息杖に持たせて肩を休ますりなき(會科出)

片殺の千木 片殺の千木や内外に曇りなき(會科出)

〔千木〕は板木の略、切棟の端の材を棟の角から組合せて空へ出したもので、今神社の屋根にのみ用ゐる。その櫓の一角を殺いだのを片殺といふ、伊勢の内宮の内角を殺き、外宮のは外角を殺いである。この文は「内外」の序に用ゐたのである。風雅集神祇歌の部に「片そぎの千木は内外に變れども審は同じ伊勢の神風。」

***肩たすけ** 隨分稼いで親達の肩助けと女殺

〔肩助〕力になること。てだすけ。もと肩の疲れを助ける義で、肩を動かす人から起つた語である。かたち かたちの父の親の手を水離れせぬお龜とは(卯月池) 堅地の長持嫁に傳はり(卯月池)

〔堅地〕堅固な地質。かたちの父は頑固の氣質な父。堅固の長持は、長持の地に漆を塗つた大布を張り、更に其上に漆を塗つて作った長持。

***かたてうち** 在所の親を召寄せて吟味もなされず、片手撃のなされや(歌恋佛)

かたなだま 乗損せばおろしも立てず、刀玉に上げて斬殺すぞ覺悟せよ(源義經)

〔刀玉〕刀にかけて斬りまたたく目的物(鑑を以てするを鑢玉といふ)。

かたのり かつ青海苔もかたのりや(出世景清)

〔堅海苔海中に生茂する暗紅色の藻類であつて、體は殆んど緑に扁壓して質堅く、多数の枝を羽状に出す。〕

***かたはみ** 總甲・酢漿草・穂挾(實古教信)

〔酢漿草〕小草の名で、地に延び生じ、花三瓣である。この形を紋とする。かたみぐさ 初見草なる額佳草形見草かや(十二段)

〔形見草〕菊の異名。二條良孫撰藏玉集に「形見草」菊めかれせうい見まくの形見草、なれしも秋と風名種に」。この文は草の名者であつて、形見を形見草にひかけたのである。

かたむ 小貼さばしるせざらぎにくだみて(大藏虎)

七九



〔みばたか〕



〔りたか〕

かたむくろ 新七とやらいふ手代、かたむくろに政道し(淀鯉)かたむくろに曾我を引くおのれば最負の引倒し(會橋出)かたむくろの親仁殿、疑の念なきやうに誓紙書かすが合點か(天綱島)へんくつ。かたなく。風流曲三味線(寛永七年刊)に「昨日は田舎侍のかたむくろなる人にも、氣に入相頼り夜更くるまで無理酒に酒み」ひとむくろをも見よ。

かだめ かだめ甘海苔春もまた、若布まじりのめざしなす(出世景清)有がたかだめの臺引物(寄庚申)「加太布」紀伊國海草郡加太の名産、帯袋の稱。現今も加太町の名物として賣る。

かたをか われなこんやのかたをかに、何とか思ひ染川(重井簡)「片岡」元祿寶永頃に於ける歌舞伎名優片岡仁左衛門を云ふ。元祿太平記(元祿十五年刊)卷之八、道頓堀に吹く嵐かなの條に「片岡仁左衛門殿後にしては三國無双、第一男振大位にして勿論あり、然し物言ひつなさうに聞ゆ御事實事おもはしからず。名人「忍歴」に「元藤川伊三郎とて三味線彈なり、中年に俳優となり片岡と改む、享保元年二月三日歿す歳四十四。」

かたをなみ 「わかの浦にしほ満ちくればかたをなみ云々」を見よ。そりやこそと、お徒衆やには

二人をすがりとめ、兩方へ引分(舟渡與作)「徒」かちざむらひ(徒侍)の略。主君などの供に徒歩で従ふ侍の總稱。馬に乗らないで徒歩で行くを徒歩立といふ。

かぢ 此法印を頼めば本復はたつた一加持(安殿)金胎二器の加持香水、王化に潤ふ秋津津民(尊隆天皇)幸これに奥院の加持土砂を持合せたり(以呂波)先づ加持の讚をぞ誦せられける(興九)

「加持」加は力を與へて加護する義。持は攝持して失はぬ義。眞言要記に「加者、諸佛大悲來加行者、持者、行者信心以感佛因」。加持は眞言宗で獨に用ふる語で、病氣災難を除く爲に、或は獨船などを用ふ、或は印相を結んで、陀羅尼を唱へながら佛の加護を祈る咒法である。「加持香水」とは、加持の咒法によつて佛力を加へ淨化した香水。「加持土砂」とは、淨水で洗ひ清めた土砂を咒法を唱へて加持したもので、これを病者又は亡者に與へて利益を得ますと云ふ。

「加持の讚」とは、加持の時に誦唱する咒文。銀治屋の仁藏 灰まぶれの銀治屋の仁藏、身にさへ着にいく緋縮緬に足を四本踏入込んで、その罰は何とせう(水朔日)仁藏は二藏とも書き、銀治屋の弟子を呼ぶ稱。井原西鶴撰、男色大鑑卷之六、京へ見せいで残りおほいもの條に「三月三日は彌の礎打日なり」と見えてゐる。序に云、京都七條通り銀治屋の仁藏(駿河金彌)の弟子が、島原の名妓吉野を深く戀慕した。吉野その心を隠んで一夜仁藏に身を任した。仁藏深く喜び、且つ

我が身の果敢なきを嘆き、遂に桂川に投身したといふ。仁藏も銀治屋の弟子の郡で本名ではないといふ。巢林子のこの文も、銀治屋の弟子の意にいうたまでである。

かぢゆう 同じ家中の相役人堀川波鼓)「家中大小名の家來の總稱。同じ家中」は、同藩の武士。かちん かちんの装束に金襴の籠手(世總曾我)「湯漏」の意から出た語で、蓋を掲げて染めるから云ひ、濃き紺色をいふ。湯と書くは當字である。勝色の義として縁起を説つて、武器などに用ふる由平義説に見えてゐる。昔時播州御所の里で此の色の布を染めて賣出したので、飾師の湯なまといふ。

かづがう 「みなうかづがう」を見よ。かづがう 二百枚の價では、山の奥はな(吉岡榮)「かたつ」かたつ(片付)であつて、物の足らはぬこと。現今福山市地方で「節約してどうかかうか生計の立てられること」をかづがうと云ふ。新古今集に「秋は来ぬといつしか空の晴れもそ。かづがう三日の月ぞさやけき」。本朝二十不孝卷四に「甚七いつとなく人の慈悲を受けかねかづがうつなりぬ。

かづき 昔時婦人外出の時、顔を隠す爲に頭から被つた小袖である。貞丈記 卷之三、小袖類の部に「古より女はよそへ出づる時はかづきを穿たり、今も京大阪などの女は被衣を穿るなり、古き物語などにきぬかづきの女とあるはこの事なり、古の被衣は白き單の小袖なり、今は色々に染めて裏付けたるあり、襖襟をも染めたるもあり、兩袖をさげて被くな

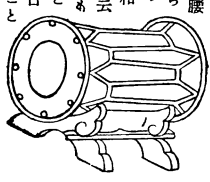
り、被衣の親縫帯の小袖に替る事なし、入り形を前へ下げて被つたり、これは、顔へ深く掛り顔を隠す爲なり、江戸にては今も被衣を穿る事なし。

かづく かのづきの海士(最明寺殿)「湯水をもぐろ。和訓琴に「海人のかづくは湯」の字をよめり、被と義通ず。「がぶる」をも見よ。かづき」は柳成名詞。

かづこ 左京が娘春姫女ながらも家傳をつき、琵琶琴竹の物の音、太鼓羯鼓に暗か(ゆゑ三世相)「太鼓」藤上に懸せ二符を以て撃つ鼓であるが、古來誤つて腰鼓をいふ。鴨鳴翁撰、雲錦隨筆卷二に「世俗に腰に佩て打つ鼓を太鼓といへり、羯鼓は腰に帶る物にはあらず、腰に佩て撃つ腰鼓を以て太鼓と云ひ、和名久羅豆々美と云ふ、既に能狂言にも腰鼓を以て太鼓と云べり、然れば古より誤りたること見えたり、羯鼓は疊ありて下に置き二符を以て撃つなり、事物紀原に「羯鼓は本胡戎の樂器なり、羯は乃ち胡戎の號故に之を名づく。

かつせんわう かつせんわうが吹目の術、三界を見巡ること半時を過ぎず候(用明天皇)「かつせんをう(葛仙翁)の誤。葛仙翁は姓名を葛玄といひ、字は孝先。三國時代呉の異邦の人である。長生不死の道を慕ひ、左慈に従つて九丹金液仙術を受け、漢の建安中に關皇山に遊び、嘗て東客に於て臥雲庵に坐して修煉し、後仙術を得たと云ふ。辭源に「葛玄。

かづく かのづきの海士(最明寺殿)「湯水をもぐろ。和訓琴に「海人のかづくは湯」の字をよめり、被と義通ず。「がぶる」をも見よ。かづき」は柳成名詞。



〔こづか〕(載新圖才三漢和)

*かどんで

入道親子佐藤庄司御かどんでを取行ひ、城外の馬場先に御旗あぐれば(十二段)

*かどで

「かどで」(門出)に撥音「ん」の増加した語。首通。

かないろ

此のかないろは酒でないか(翁天皇)

*かなが

「銚子」鑄造の銚子。倭訓彙に「かないろ」銚子をよめり、金器の色よきをよめりて名くるにや、庭訓にも銚子金色提し見えたり。

*かながひ

「松風」花橋をかながひに金輪の鞍置かせ(大瀧虎)

*かなぎる

「金切」金屋を切る時に發するやうな音聲の弱くて極めて調子高きをいふ。

かなしばり

走り人竊盜動かせぬば不動のかなしばり(女殺) 彼等かたばしかなしばりにしてくれん(弘徽殿)

*かなづち

「金辨」不動明王の縛の繩で結んだものは解くことができないうつてこれを金辨といふ。轉じて、嚴重に縛ること。

かなづちせんべい

北野鐵鎚煎餅三郎兵衛と申す者の女房(水明日) 此れはとこの手焼の鐵鎚煎餅(水明日) [鐵鎚煎餅]當時上方の煎餅にこの名ものがあつたのを借用したのである。國花萬葉記浪花名物寄の條に「かなづちせんべい。てんま老松丁」見え、西澤一風撰の色紙餅百人後家(寛保三年刊)巻二に、花せんべい、色せんべい、かなづちせんべい、箱に入れ、あまの手わざの焼賣云々ありて、その挿畫に扇圓の煎餅が畫いてある。されば鐵鎚煎餅は扇圓で堅く焼いた煎餅である。

かなづちろん

詞をおさへひつしひつしと生木に釘打つ鐵鎚論(偶田川)

*かながち

「かながち」鐵鎚の轉音。鐵鎚。歌十編の櫻山臥と云ふ本に載せてある支考の句に「藤鞍をわすれて遊ぶ寺子共」とありて、藤鞍に「ぢぶち」と傍訓してある。

*かなぼう

そろそろ用意と帯なほし身拵へする中に、かなぼうの音人足しきりに近付きたり(大經師)

*かなめいし

「かなめいし」搖ぐともやぬけじの要石。鹿島の事觸あらん限りは(用明天皇)

*かなわ

仇と情と怨念と、三つの鐵輪に燃ゆる火に(櫻久) 親且那と三つがなわでうんほくばはれて産んで見し(酒吞童子) 兩の手に鐵輪、世間で諺ふ親子籠太鼓(酒吞童子)

*かなをか

金岡が筆のすさみの跡絶えず(反魂香)

*かにはりもの

理を非に問けて、東路へ歸れといふ程がにはりもの(備田八)

*かにな

「我に張り者」我意の方に張通する者、剛愎者。但言集覽に「かにはりものは、カカナホ」我を折らぬ者をがにはりものはいかか、愚妄、我を張る愚態。

*かのえさる

人目盗みてあらはれて、不義ちやの何のかのえさる、

かどんでー かのえさる

下巻、要石の條に「ゆるぐともやぬけじの要石鹿島の神のあらんかざりは、といへる歌は誰れ人の詠みたりけん、あまなく世俗の口なれし歌なり。常陸國誌に、土人相傳、有三大魚、岡二親日本、首尾會於斯地、鹿島明神釘と其首尾以貫之、不得動搖、響如三扇稱得釘、其堅固、此石即釘也、押唐司笑、後世の地經圖則畫之、鯨を要石と推言つた給あるはこの俗説によつたものである。

*かた

「かた」金子吉左衛門をいふ、京都にあつて道外形の名徳であつたが、正徳三年の春芝居に大阪の三十郎座で立役を勤めた。

*かねごと

そのかれごと、もいづしかに、徒癡の夢のばくる叫(今宮)

*かねざき

太兵衛めには請出されぬ、若し金ぜきで親方からやるならば物のみごとに死んで見しよ(天網島)

*かのえさる

「金環」金鑲の力で人の行動を遮断すること。人目盗みてあらはれて、不義ちやの何のかのえさる、

今日ばあしたのきのえれと、知ら
であふ夜のその報(大經師)

「庚申」かうしんを見よ。

かこのゆひ 鍼按摩久庵、洗物師の
蛇の目後家、かのゆひのお雪が
噴打連立ち(蛙合戦)

「魔子結」魔子の結、魔子の結。

かはく 行造ひ入亂れ食ひつ 食は
れつ 吠ゆる聲、梵天を驚し河伯
も住家を跳出(千正犬) 海神河
伯を祭りても猶一滴も降らざれ
ば(鏡懸天皇)

「河伯」水神。かつば。抱朴子に「河伯是華陰
人」以三八上庚日、渡河殞死、天帝謂焉曰「河
伯、故今庚辰日不治、軀渡河」。

かはく 「かわく」を見よ。

かはくくみ 火の用心の爲とて皮ぐ
くみの道服(虎が磨)

「皮包」すつかり皮で造ること。皮包括。

かはくちら 「さし」の條を見よ。

かはごさ 早天から川御座で参り
なつた(女殺)

「川御座」川御座船をいひ、屋形船である。御座
は、もと貴人の乗つた船を御座船といふに起
る。川御座船は町御座船ともいふ。蓋し町中
の川を航行するによつて、川とも町とも附い
たのである。和漢船用集、五十二、町御座船、本
名屋形船、實を取て、借故、借御座船と云ふ。惣
矢倉にて日覆屋根あり、下装敷すべし、上座
客すべし、風ある時は、用がたし、酒を携へ
妓女を載せ遊山船とす、大小席の多寡をい
はず、水主座子の多少による、二人乗二人三人
四人五人六人乗と云ふ、則呼で舟の名とす。

かはざくら 肌(白無垢)、淺黄櫻に

かば櫻(賀古教信)

「羅櫻」山櫻の一種で花一重である。馬場編青
藍袖、俳諧談時記、草に「大和本柳、羅櫻は
一重櫻なり。多識草に、羅櫻は山櫻の屬、古今
に、かにはざくらとちへる是なり」。

かはせ お禮は爲替に仕る(百日
曾我)

「爲替」此方より遣りて彼方と取替へにするこ
と。轉じて、互に禮を述べまた物の取替をする
ことを申合はうと略すること。

かはせうえう 何者なれば川せうえ
うの水上に土足を踏込み、水を濁
す(奇怪千萬)(大磯虎)

「川邊通」川邊通。通通はあそぶ(遊)と訓じ、
莊子の逍遙遊の語に出づ。古今集、秋上部に、
「秋たつ日、うへのをのことも、かも川原に川
せうえうしけるとともにまかりてよめる」。

かはたけ あるが中にも川竹の、遊
女(何の報ぞや)(三世相) 妾が昔は
うき川竹の傾城、萩野屋の八重桐
とて(龜山遊) 横笛が稚名を直に付
けたる竹の名、身は川竹となる
ためし(酒吞童子)

「川竹」川竹は水邊に生ひたれば流れの身の意
に川竹の、流れるときと思ひそめし。藤曲、
班女に「うきやもとよき思ひそめし」。藤曲、
ながら、うきふししげき川竹の流れの身こそ
悲しけれ」。

かはぢさ 根芹深芹かばぢさを摘め
ば浮藻に連れて寄る(以呂波)

「川昔」小川の邊また水田に自生する二年生草
小植物で、高さ一尺餘に達し、帯紫白色の小

形の花を開き綿狀花序をなす、若き莖葉は食
用となる。



〔さぢはか〕

かはづがけ 正しう河津が勝つた
の故、今に傳へてかはづがけと云
ふ相撲の手あり(五人兄弟)

「河津掛」相撲四十八手の一。敵手の差いた
方の右手を上げて敵の首を捲き、又其方の足
を内から敵の足に踏み、反身になつて後へ捻
り倒す手をいふ。昔河津と侯野とすまうた
時、侯野は大男で河津を差上げ投げようとし
たのを河津この方法によつて侯野を倒したの
で、この方法を河津掛と名付けたのであると
傳ふ。

かはのおんざうし

「がまのおんざうし」を見よ。

かはらけ 年の往かぬ娘ぢや、土器
を三方に、口取は脱斗昆布(萬年草)
内儀は銚子、娘はかばらけ、牛蒡
も身祝(金門松)

「土器」素焼の杯。心中萬年草のこの文は、結
婚の慶宴をいふのであるから、素焼の杯を三
方に載せて出すをいうたのは勿論であるが、
陰毛のない女子の陰部を土器(又はお茶碗)と
いへば、それをきかせて年の往かぬ娘ぢや、
土器(云々)といひ續け、そして本報料理に掲
栗、脱斗昆布を最初に出したのである。かはら
けと見。又金門松のこの文も、土器に

娘のまだ陰毛なきをきかせ、それに對して毛
牛蒡(その條を見よ)をきかせて、牛蒡も身祝
といひつづけたのである。今宮心中に「土器
焙り、文出しで揉まんとするを」とあるのは、
土器に入れて焙つた文を引出して揉まうとす
る意。永代重寶記(元祿八年刊)に「文は古き
程がよし……揉りたるは袋の功うすし、土器
に入れ焙り乾かすべし」と見えたる。

かはらげ 扱その次はかばらげの、
野髮野爪に逞しく、丈拔群に立勝
り(大磯虎) 脱斗昆布にかばら毛と
祝ひ乗つたるは、さつても伊達な
お侍と(靈女)

「川原毛」馬色の毛色、白うて黄赤を帯びた
もの。略、徳名抄に「駿馬川原毛」。

變りちんつの國訛 田舎の客に揚げ
られて、連れてあるじの後家交り、
かばりちんつの國訛(女殺)

「ちんつ」は「ちんつちんつちんちんちんつて」な
どいふ口三味線をいふ。國訛のある一種變つ
た口三味線。

かはん 加番見れども青もなく、上
りも知らぬひらよみに、そも三枚
ばいさ知らず、取得ん事はけなし
なり(大磯冠) こなたは加番に青の
ぼん様、かるたに(太この二)「安柳」

「加番」加留多の遊戯の用語、字半須半加留多
をするに、己が番に紋線と同じものを合さず
として餘所の札を廣ふことを云ふ語であらう

かはん 追付け後より加番として、
佐佐木十藏廣綱を遣はさん(最明
寺殿)

「加番」武家時代、城代の副として留守を衛る
番を城番といひ、城番にて番の手足らざる時

漫紀卷四、戊子瘟疫の條にも、「鐵杵相枕袴令人不敢正視」とある。孟子梁の墨王に語つて曰く云々」をも見よ。

*かへす 卯の色を黄に返して、柚標につけたる鏝(最明寺鏝)
〔返〕或色に染つてゐるものを他の色の中に入れて染返すをいふ。

*かへせしやう 言ふいとて祐經を小楯に取つて壁訴訟、顔には似合はぬさとしいさとし(扇八景)
〔壁訴訟〕壁に向つて訴訟する義。誰に言ふとなく遠廻しのでてこすりを言うて、不平を訴へること。毛吹草に「きりぎりす秋を告ぐるを壁訴訟」。

*かへな 替名は鯉様、十萬兩遣うて、こちとが百錢落いたとも思はぬ程の身代なれども(泥鰌)
〔替名〕遊里では替名を呼んで人に知られるのを氣遣ひ、替名を呼んだものである。多くは姓または名の一字を取れど、その客に縁ある他の物から取つて替名にしたものもある。淀川から産出する鰻を泥鰌と稱するによつて、江戸屋敷次第の替名を江戸屋と泥と置かして、江戸屋とあざなしたのである。嘉平次を平、河内屋と兵衛を河與、名古屋山三を平半、半七を半などいへるは異林子の作中に見えて、廊下に於ける替名である。

*かへらまうす これを誠に、氏神の御山を拜む心地ぞと、かへらまうして眺めや(十二段)
〔返〕報賽す。宇津保物語に「萬の神たちに

返申のみでぐら奉らんと、河原に出で給ひて。
歸る柏屋留る柏 どうでこい、つら死なうわい、つんと足が進まぬと、歸る柏屋とどまる柏(生玉)

柏屋半兵衛は歸り、嘉平次、おさがは留る。嘉平次、おさがりの人發卷になつてゐるを柏屋に見立て、柏といつたのである。

*かへるまた こころやうかへるまた、様、うら板、土瓦、ぐわらぐわらどうど地に落つ(開八州)
〔藝段〕こころやう(虹梁)を見よ。

*かほみせ 何とかかほみせ見やつたか、札買やる錢遣らうか(重井筒)
〔顔見世〕顔見世芝居のこと。また、地方では十一月の初めに顔見世を行ひ、明年の役者の座組はこの狂言を定めるところである。成の顔見世をも見よ。黒川道祐撰、日次紀事十一月の條に「此月初四條河原狂言、井佛備彌之役者、入易後各施、藝、諸人改觀、俗是稱之顔見世、是使見之人知役者顔面之義也、到臘月二十日許、各止之、來年正月二日又始之」。

*かほよばな 十八九なるかほよ花會娘ね 切ればしほめるかほよ花、誰がそれぞと見知るへき(井筒)

〔顔見世〕若の異名。顔見世の名より美人にかけらふことが多く、かほよばなはかほよばなとも云ふ。萬葉仙童抄に「かほ花とはかきつばた也、かほ鳥の鳴く時に咲けば、かほ花と云也。八雲御抄に「かほ花はうつくしき花也。降曲、杜若に、時を忘れぬ花の色、かほよ花とも申すやらん、あら美しの杜若やな」

*かま さあ母のかまがわせた、何言はるると樞の穴、耳を附けてぞ聽

きあたる(女親)そこらなつたらぬかま親仁、オオこりやでかした、イナよう言つた(生玉) 親仁とかまの今めとが、これも在所へ行く風で(卯月杵)

〔鎌〕鎌は身と柄とが折曲つてゐる故、邪曲の意に喩ふ。邪曲。撰歌人、里村紹巴撰、匠材集(寛安四年刊)に「かまのさう、おさる數體」

*かまく 左様の事にかまけてうつく暢樂に非ず(蛙合戯)
氣貫の義であらう。抑泥する。俳言集覽に「倭訓英、カマケ、感をよめるは日本紀異記などに見たり、今俗事にうちかり居るをカマケと云ふ」と云近し云々、愚按、関東にてカマケと云ふを備後福山あたりにて食著すといふ、カは詞の上の助語にて、カホリ、カヨワイのカ、マケは實なるべし、物に感じ着して實る也。

*かまくび 煙管の雁首・細首・元首・捻首・鎌首換へよなら今ちや(千足丈)

〔鎌首〕煙が首を曲げてもち上げてゐるやうな首つき。細首で捻首をいふ。井蛙抄第六に「波蓮はかまくびをまたて、いさかひけり」

*かませんにん 蛙は即ち蝦蟇仙人か仙術(吉岡茂)

〔蝦蟇仙人〕蓬髮洗足で嚙笑しながら蟻を弄んでゐる仙人。桂林漫録に「蝦蟇仙人。海蟻、姓は劉、名は壽、渤海の人なり、金に仕へて相位に至る、後印を納めて終南山に入り、道を學びて仙たり、今蓬頭洗足嚙笑の人、劉海三足の蟻を持ちて之を弄する形を畫き、劉海三足の蟻といふ、直に劉海を以て名とす、世學つて其名を知る者なり」と無しと、碓石劉談に載せたり。大原問答青葉笛に「人間の及

び難きがま鐵杵が撥なり」とあるがまは、蟻蟻仙人のこと、鐵杵(仙人及山の名に此名の者がある)をいふにつけて、蟻蟻仙人鐵杵仙人の妖術を聯想して、かくいふた。

*かまど 追従表裏の倭臣とが、御尤御尤の輕薄詞に育てられ、我知らずのかまど將軍、御意見申す者なきゆゑ(天智天皇) 一門振舞祝儀の使、甕の餛飩の雲天舞、甕の煙ほのぼのと、戸ささぬ御代の民百姓(鶴丸) 身代どうもたちかれ、既に甕を破る(ころ)(水明日)

〔甕〕甕將軍は甕のある處での將軍の義、家庭内で大將軍。家庭で權を振ふる者を云ふ。鶴丸、井原西鶴撰、胸算用巻二に「茶は腰ながら内儀に持たせ置きて、手も出さずに飲みけれども、面々の甕將軍の内に續く強者なれば、誰が外より尤むる人なく」

〔甕の煙ほのぼの〕は、民の賑はへる有様を云うたで、仁徳天皇の御歌「高き屋に登りて見れば煙立つ、民のかまどは賑はひにけり」の故事によつたのである。

〔甕を破る〕は、其家に住はぬ義で、破産または身代限りをするを云ふ。史記・項羽本紀に「項羽乃悉引兵渡河、皆沈船、破釜、置こたある、身の破産を覺悟したる行爲である。

*かまぬりよし 紅蓮の井戸は焦熱の地獄のかまぬりよしなやと、いそがぬ道ないつのまに(大經師) 〔紅蓮寺〕 善惡上の語、甕を塗るによしといふ。

*かまのおんざうし 蒲の御曹司範頼(大原問答)

かへす—がまのおんざうし

〔蒲御書司〕源範頼をいふ、遷州蒲生御所に生れたので蒲と云ふ。書司はその條を見よ。

***かまひげ** 糸鬘の鬘かりつけた鎌鼈奴(薩摩歌) このかまひげで頬すりば痛かろも

〔鎌鼈〕鎌形に鼻の下から左右の頬へ續いた髭で、昔時、奴などが生したもので、髭の少ない者は附鬘をさしたり、鬘鬘を塗り附けたかまひげ

***かまやうり** 鎌槍は筑後の久留米(薩摩歌) 〔鎌槍〕

***がまん** その頃守敏僧都とて、我慢邪欲の悪僧あり(嵯峨天皇)

***かみかぜ** 神風の伊勢のほまなざし打そよぎ(鎌田)

〔神風の伊勢の枕詞である。冠解孝に「かみかぜの(そよぎ)の國。こは神風の息といふべきを吹きて伊の一語にひかけたるなり云々。』

***かみこ** 紙子の廣袖・革柄の大脇指(天經師) 勝二郎は約束の時分過ぐると、紙衣に股引すぐに丹波の旅立立て(渡繼) あれ今言うた紙子吉岡、よい所へ見えたなう、いとしや今日ば子を負うて(吉岡築)

京の吉岡紙子染(重井節)

〔紙子〕紙衣とも書く。遊を引いた紙子紙を揉んで着物に仕立てたもの。黒川道親撰、雍州府志、土庫門下、眼器部に「紙衣。倭俗糊合神油少許、織白強紙、然後塗神油、日乾、如此歌へと呼び立つれば。』

〔紙子〕紙衣とも書く。遊を引いた紙子紙を揉んで着物に仕立てたもの。黒川道親撰、雍州府志、土庫門下、眼器部に「紙衣。倭俗糊合神油少許、織白強紙、然後塗神油、日乾、如此歌へと呼び立つれば。』

〔紙子〕紙衣とも書く。遊を引いた紙子紙を揉んで着物に仕立てたもの。黒川道親撰、雍州府志、土庫門下、眼器部に「紙衣。倭俗糊合神油少許、織白強紙、然後塗神油、日乾、如此歌へと呼び立つれば。』

度色目赤爾後晴天一夜露宿則度色、於是兩手揉和之以是製衣服、是謂紙衣又稱紙子、有便體寒氣。』吉岡紙子染とは、吉岡染の條を見よ。仙臺の坊様を見よ。

***かみささ** はみ出し鈔もかみささびて、鏡語りし師走の果(夕霧)

神道の義。蕭りて何となく物づくならぬをいふ。この文「かみささび」に鈔をかけたのである。

***かみさま** 隠居の貞法七十三、眼鏡いらす杖つかす、齒は一枚も抜日なき男勝りのかみ様にて(公喜)

〔上様〕上方にて年寄つ大人の妻女の敬稱。浪花方言「文政二年成、寛永に「かみさん。退筆をかくいふ、おかみさんといふはお上様なり。浪華の風に「當地には、町家の妻などはおしなべておさんと唱呼す、おかみさんといふは老女の様になり、五六十に及ぶ者姿を呼ぶおかみさんと唱ふればなり。』

***かみするをなご** むれから起つた喧嘩さうな、大事にはなるまいかと、上する女子下男(遊多) 揚屋の上する女子下男(遊多)

〔上爲る女子〕揚屋の座敷の取廻しをする女。仲居、井原西鶴撰、好色一代男。六に「さる揚屋にいつより早く御出あつて待ち給ふこと嬉しく、上する女に心をあはせ小座敷に入りて鳴渡り響渡つて入込めば、主人主婦上する女子定附けの座頭の坊まできこえ、序に云「上する男」といふもある。これは座敷を働らす取廻しをする男をいふ。好色一代女。巻之二、淫婦中位の條に「上する男お床は二階へと呼び立つれば。』

〔上爲る女子〕揚屋の座敷の取廻しをする女。仲居、井原西鶴撰、好色一代男。六に「さる揚屋にいつより早く御出あつて待ち給ふこと嬉しく、上する女に心をあはせ小座敷に入りて鳴渡り響渡つて入込めば、主人主婦上する女子定附けの座頭の坊まできこえ、序に云「上する男」といふもある。これは座敷を働らす取廻しをする男をいふ。好色一代女。巻之二、淫婦中位の條に「上する男お床は二階へと呼び立つれば。』

〔上爲る女子〕揚屋の座敷の取廻しをする女。仲居、井原西鶴撰、好色一代男。六に「さる揚屋にいつより早く御出あつて待ち給ふこと嬉しく、上する女に心をあはせ小座敷に入りて鳴渡り響渡つて入込めば、主人主婦上する女子定附けの座頭の坊まできこえ、序に云「上する男」といふもある。これは座敷を働らす取廻しをする男をいふ。好色一代女。巻之二、淫婦中位の條に「上する男お床は二階へと呼び立つれば。』

〔上爲る女子〕揚屋の座敷の取廻しをする女。仲居、井原西鶴撰、好色一代男。六に「さる揚屋にいつより早く御出あつて待ち給ふこと嬉しく、上する女に心をあはせ小座敷に入りて鳴渡り響渡つて入込めば、主人主婦上する女子定附けの座頭の坊まできこえ、序に云「上する男」といふもある。これは座敷を働らす取廻しをする男をいふ。好色一代女。巻之二、淫婦中位の條に「上する男お床は二階へと呼び立つれば。』

〔上爲る女子〕揚屋の座敷の取廻しをする女。仲居、井原西鶴撰、好色一代男。六に「さる揚屋にいつより早く御出あつて待ち給ふこと嬉しく、上する女に心をあはせ小座敷に入りて鳴渡り響渡つて入込めば、主人主婦上する女子定附けの座頭の坊まできこえ、序に云「上する男」といふもある。これは座敷を働らす取廻しをする男をいふ。好色一代女。巻之二、淫婦中位の條に「上する男お床は二階へと呼び立つれば。』

〔上爲る女子〕揚屋の座敷の取廻しをする女。仲居、井原西鶴撰、好色一代男。六に「さる揚屋にいつより早く御出あつて待ち給ふこと嬉しく、上する女に心をあはせ小座敷に入りて鳴渡り響渡つて入込めば、主人主婦上する女子定附けの座頭の坊まできこえ、序に云「上する男」といふもある。これは座敷を働らす取廻しをする男をいふ。好色一代女。巻之二、淫婦中位の條に「上する男お床は二階へと呼び立つれば。』

***かみたうじん** 表の間借切つた上唐人、船頭が馴染、筑前まで乗せなげりやならぬといふ(博多)

〔上唐人〕上は上方の意。唐人は唐國の人。轉じて、遷國で業性の知れない者をいふ。上方の業性の知れない者。

***かみはな** いづやらの紙花も思の外に遅なばり(二枚繪) 一つ飲みやれ看せんと、ひらり紙花七九寸木枕に打敷きて(夕霧)

〔紙花〕遊所にて花を云ると先づ目録を書いた紙を造るに紙花と云ひ、後に紙花に記した物を造る。紙花七九寸は、即ち紙花に用ゐる。延紙縦七寸、横九寸の寸法である。一目千軒寶曆七年刊に「遊所に花を打つて紙を出す、これを俗に紙花といふ、昔よりある事なり。』

***がむしや** 彼の男犬めば、女子をじゆつながらするがむしやな憎い奴ぢや(千疋犬) 口も心もさかさかしく、がむしやの上に氣も早く(虎が唐) 中にも剛健といふがむしや者(國性爺)

無道に物事を振舞ふこと。又その人ががむしやば我輩者、辨げども、もと「がむさばり(我輩の略訛で、我輩陋劣の義であらう。)

***かめばら** 二年餘り誕生なきは何しに先帝の御子、血塊龜腹などの病、宮中に置いては後の禍(浦島)

〔龜腹腹中に一種の癩塊を生じる病。妻注倭名類聚抄に「按、加波波良、龜腹之義、病源候論有龜腹云、龜腹者謂腹中凝結如盤狀一是也。』西鶴雜言。卷四、諸國の人を見知るは伊

勢の條に「いかなる前世の因果にや、當年十三になりけるが今に足立たずして、然も龜腹とか申して見苦しく。』

***かもめじり** 御かもじり様悟もじに、先づお暇といふ(籠(松風))

〔囑文字母の文字詞。文字詞は、足利時代の末期朝廷式微にして供物の物備はらない爲、女官等その物の名を呼ぶを云ふで、何もじりうらうら體語から起つた云々。この語とは別に「かみ(髪)のこを「かもじ」といふのも、髪(髪)の文字詞で即ち髪文字である。)

***かもめじり** 十東の御奴鴨尻に佩きなし(日本武尊) 上り下りの旅人衆も、關の小萬といふ名に恥ぢて、百やる人も二百やる、一奴の貰ひもかもめじりに取りたる(丹波與作)

〔鴨尻といふ水鳥は水に浮んだ時尻の羽が上方に撥ねてゐる。』

〔刀、刃の尻を上、反して佩をいふ。平家物語長門本巻二、西光被三取取條に「こがね作の太刀かもめじりに佩きなして。』

〔鴨尻に取る』とは、鴨の尻の上方に撥ねてゐる。

〔冬瓜圍園に栽培される一年生の蔓草で、莖は卷類によつて他物に纏はり、葉は心臓形で通常葉状に淺裂し、花は雌花と雄花と同株に生じ花冠黄色である、果實は大形の漿果で食用に供し、また眼痛などの病を治するに用ひる。菓林子のこ、の文は、取つて嚙むに冬瓜をいひかけたのである。ふり「はうり」の古語。

***かもめじり** 十東の御奴鴨尻に佩きなし(日本武尊) 上り下りの旅人衆も、關の小萬といふ名に恥ぢて、百やる人も二百やる、一奴の貰ひもかもめじりに取りたる(丹波與作)

〔鴨尻といふ水鳥は水に浮んだ時尻の羽が上方に撥ねてゐる。』

〔刀、刃の尻を上、反して佩をいふ。平家物語長門本巻二、西光被三取取條に「こがね作の太刀かもめじりに佩きなして。』

〔鴨尻に取る』とは、鴨の尻の上方に撥ねてゐる。

〔冬瓜圍園に栽培される一年生の蔓草で、莖は卷類によつて他物に纏はり、葉は心臓形で通常葉状に淺裂し、花は雌花と雄花と同株に生じ花冠黄色である、果實は大形の漿果で食用に供し、また眼痛などの病を治するに用ひる。菓林子のこ、の文は、取つて嚙むに冬瓜をいひかけたのである。ふり「はうり」の古語。

***かもめじり** 十東の御奴鴨尻に佩きなし(日本武尊) 上り下りの旅人衆も、關の小萬といふ名に恥ぢて、百やる人も二百やる、一奴の貰ひもかもめじりに取りたる(丹波與作)

〔鴨尻といふ水鳥は水に浮んだ時尻の羽が上方に撥ねてゐる。』

〔刀、刃の尻を上、反して佩をいふ。平家物語長門本巻二、西光被三取取條に「こがね作の太刀かもめじりに佩きなして。』

るやうに、秤竿の尻の上方に撥ねる程秤目を充分にして取る意にいふ、五箇の津路情男(元祿十五年刊)の序文に「世に世に、商人の算用、秤、端、倍、二十、露、端、之、短、秤、目、之、白、鵲、尻、之、取、方、於、知、給、備、雲、爾、風、流、涉、浮、橋、(元祿十六年刊)卷之三、八坂の茶屋は幸神の引合の條に「先此うらの振袖はと尋ねれば、あの人はい九月からの勤、お翠かとはや茶の下をたき付け、お位は銀三十二匁、九分鵲尻にはからせねばなりません、それはそれははからせ世の末、白人の身もあはぬもの云々」傾城仕送大臣(元祿十六年刊)卷之五に「まだ安物は伏見のか、山、茶屋へおろして繩手の吉野屋に勤め、器裏衣服背に替らず、是一人があが、若已上九人、十八匁の内にて十五匁下りたればは大分の掘出し、三匁を鵲尻にはなますれば、やりはなしの高笑、せんしやうは言勝、偽言はつき次第、何に一つ不自由なし」以上「鵲尻に取る」と云ふ意はこれで明かであらう。大矢敷(延寶九年刊)に「結目の帯おもひやるかも尻互に起きて雪の明はの。萬治、享保にかけて、若衆の髪を削り出し反らしたのを鵲尻と云うたのも、皆鵲の尻の撥ねてゐる様によつた言葉である。

かもん 天神太夫の身でもなし、さ

もしい金に氣が觸れた見世女郎のあさましさ、世間の唱へ傍輩のからもん殿を始めとして格子女郎衆の手前もあり(冥途飛脚)當時大阪新町に實在の遊女掃部をいうたものか。伽羅女の名寄に「新町通筋つちや理兵衛内大夫かもん引舟大はし」と見えてゐる。或は俳優中村歌門をさかせるものか。歌門は正徳元年正月都萬太夫座興行の傾城九品淨土の狂言に、梅川に扮した縁によつてかくいうたものか。

かや 樞・榛・樵(嵯峨) (穂山地に自生する常緑喬木で、葉は三つ葉に似て、花は白く、果は赤く、食用) [やか] 天皇



かやつりぐさ (用明天皇)



かよひぐるま 命の夢の通路を

がやとや 八つ太鼓がでんでん傳法、後がやとやの伊丹へいけ田(水明日)

からうちをつな 我身は何かからう

「唐打綱」唐絲で編んだ綱。源氏物語「若菜上の巻に「猫はまだよく人にもなつかぬにや、綱はれにけるを逃げんとひきかけけるを云々」とありて、唐猫逃出する時その首綱御簾にかかり、御簾あがりてその目に坐せる女三の宮の美しい姿が柏木中将の目にとまつた、柏木宮れより女三の宮を無器し、遂に密通して兩人離儀の身となつた。この文はその意をきかせたのである。

からがき 人の心を二重染、倭にあら

「唐柿」染色の名、黄に澁色を帯びたもの。藤大臣のこの文は「まづ初春の空に云々」を見よ。

からくむ 龍馬が原に八町四方に

「唐子」からわ(唐輪)とも云ふ。その條を見よ。

からこをどり

九月の七日九日氏神殿の祭、本踊いる唐子踊いろ見事なことば(博多)

からこわげ 唐子踊には薩摩櫛、島

「唐子踊」唐風の衣装を着け、唐兒に扮粧してをどること。諏訪神社の祭禮は長崎大名物の一で、昔時は九月七日大波止場假屋の御旅所に渡御あり、年番町の子女綺羅を盡して着飾り御饗饗等の寶物を掲げ舞の行列である。九日は還御の日である。七日九日は本踊、唐子踊など最も盛んであつた。

からざげ 假令清十郎引張帆になら

「乾鞋」乾鞋の鵲を去つて葉乾にしたもの。巢林子のこの文は、張帆の意に引張帆といひ、帆を船にきかては、張帆の意に引張帆に處せられ木の空に曝されて、日乾になることを云ふ。大經師昔隱に「木の空に曝されて、屍を籠で突かれて」とある。

からさび

銀の心葉鬚づらに取つつけ、韓絢の御佩刀太手纏に白木綿かけて(振袖始)

からさき

「韓絢」あからさき(明眞身の約轉。利銀をいふ。日本書紀・神代上に「地醒而醒 葉莖鳴尊乃以地醒御之舞、斬頭斬腹。武家名目抄刀那部に「按、韓絢の傍詞からさきとありしか讀むべし、私記に加須枝と讀みたるはよからさき、且其形似動發云々」といはるは、字に就て設けたる妄説なり云々、佐比は佐微と同じ語にて、即眞身也、刀那の身をいふ、凡もの、並ならぬを察めて、加良てその上になつていふはいと多かる、その見えたるはこの韓絢はじめなるべき、上古の物の名後かみたらへことども多かるべければ、そのかみ其例なしと疑ふべきにあらざる。

からさを

「殺骨」器具、竿の先に、樞があつて、これに更に竿を附け、回らして稲妻などの穂の杓をこぎたるを打つ具。

からさんがい

如何にいたづらす

***かりぎぬ** 豹の左京盛光は红梅の狩衣、織色の指貫ふみしだき(二世相)

「狩衣」(關股)を少し簡略にした衣服で武家着用するものであったが、後には公家にも野狩遠行などの時に着る略服となり、絹綫を用ひて華美に作られるやうになつた。

***かりくら** この度の狩くらには虎より猛き猪を乗留め(會橋山)

「狩座」(狩場)和訓乘に「かりくら」東鑑に狩倉と見えたり、狩場をいへり。

***かりはり** 男の手癖足癖も私らがやうなかりばりばり噛付きも仕かぬ(開八州)

「がにはり」に「が」が下の「り」に引かれて「り」に就つた語で「ふんばり」を「ふりばり」の字様を見たりとふの類である。「我利張り」の字義ではない。「がにはり」の「を」を見よ。

***かりほこ** かり鉾敷槍手に當るを幸に投付け(國性爺)

符鉾で、符鉾に用ひる鉾といふことであらう。(或は雁股鉾の略で、鉾身が又になつて開いたものをいふか)。

***かりほのいほ** 錦の榊引換へて、かりほの庵の草葎(酒香童子)

「かりほのちほ」(假庵の庵)の略、田を守る者の居る番小屋をいふ重詞である。萬葉集には借庵と書してある。

***かりまた** その大雁股で射殺されまし(松風)

「雁股」(雁の一種、其形が蛙の股の如くなるる)を以て、「かへるまた」の「し」を略し「る」を「し」に轉じた語である。鎧矢には雁股をさすに定まり、「かぶら」を見よ、「鎧をつけないで直に雁股をさした矢を雁股の矢」といふ。

***かりようびんが** 遊君の小棲ほらほら、道中にて迦陵頻伽の火の用心、町を廻つてとんとんと(扇八景) 誠ある傾城と迦陵頻の雄鳥は、繪に書いたも見た者ない(夕霧)

「迦陵頻伽梵語(Kalāpīṇa)の音寫、迦陵は好の義、頻伽は聲の義なるによつて、好聲鳥または妙聲鳥などと譯す。印度のブル鳥をいふたのであると云ふ。この鳥雀より稍小で、雀の羽色に似て黒色交り、嘴の赤い鳥で美音に響く。これを美化して半身は天女、半身は鳳凰のやうな鳥の姿に畫く。これによつて美聲貌の美女に喩へても云ふ、迦陵頻は迦陵頻伽の略。

***かりあらは** ゆふべは宿をかり童(酒香童子批書)

「假童」山伏の異名、修驗者増補和訓乘に「かりわらは」は假童にて山臥のこと也。

***かる** これは大将の拂ひ物、大抵では賣るまじきが、但し損料でばしかつたか(女備)

「借」借りる。東京で「かりり」かりた(借といふ)、京阪中國地方では「かつた」といふ、かつの條を見よ。

***かるかやど** の、こは古の菟菑殿のしるし(茂り) 春の草(萬年草)

「菟菑殿」菟菑道心繁氏の古趾をさす、高野山内の菟菑堂のある處である。筑紫守加藤左衛門繁氏、仁平三年彌生の末、酒宴の折し花の香が盃上に落ちたのを見て世の無常を感じ、妻子を捨て出家し、高野山に登つて菟菑道心と法名した。後に妻の千里と子の石童九が父を尋ねて高野山に來り、千里は病に罹つて山麓の磯文路の宿に歿し、石童九ばかり高野山に登り、菟菑道心に逢つて其弟子となつたと云ふ。

***かるさい** かるさい・らんげん・繻子・天鳥誠(博多)

「繻子」(Caracoe)であつて毛織物の名。和漢三才圖會(二十七)に「波羅以木倍留止和牟・加留左以須太女、以上之數品皆毛織也」

***かるた** かるたの繪の付く祈禱にあざぶの明神釋迦牟尼佛(女殺)

「かるたは西班牙語(Carta)である。我國に傳はつたのは、天正八年英吉利船で舶來したのが最初であらう。うんすん加留多の繪札の中に「海馬」釋迦の名の繪札がある。聖徳太子繪傳記・片摘の后連行の條に、「かるたの釋迦を掲り詰めた世の中」と見え、當世武野俗談に「下手は海馬を二にも三にも打せ、上手は海馬はあざに打釋迦は十のかかりに打す、釋迦の場にて打事なり云々」と見え、この文は祈禱といふからに、骨牌札の名の「あざ」と、骨牌は麻布で作るから、それらをかきかして、それを明神を添へ、又骨牌札の名の「しやか」をかきかして牟尼佛を添へ、以て神佛名のやうにして洒落である。

***かるたむすび** 基盤格子の染帯を歌留多結や、年配も二十二三四五六七(薩摩歌)

「骨牌結」天和利頃から寶曆頃まで流行した帯の結び方で、四角に結び、其形が骨牌に似たる。この名が、

「かるたむすび」の歌舞、妓事始に、

「男の如く四角にするをか、折るた結といふかるも 肩にかるもの花折りかけ



て、裾にゐるのが寝た所々、蛙合駝枯草。重慶抄にかるもとは枯れたる草なり、其草をかき集めて猪はふす也、猪の水居ると七日までふす(へり)ゐるのじを見よ。

***かるた** 阿修羅・迦樓羅・緊那羅(會橋山)

「迦樓羅」梵語(Garuda)の音寫、金剛鳥と云ふ、鳥類の王で謂を食となす。慧苑音義上に「迦樓羅、或曰羯路茶此云食吐苦聲、謂此鳥凡取得迦先肉啖中得吐食之云々」。

***かれい** 君立坊の始より後宮佳麗多き中に(弘徽殿)

「佳麗」美女、白居易の長恨歌に「後宮佳麗三千人」。

***かれうびん** 「かりようびん」を見た。

***がれん** 「きり」を見よ。

***かるふ** 頭抱へて雇人にかるばれ、小宿さなへ(往ん)だが(博多)

「賃ふといふことを東國にてセウといふ。長崎又四國にてカルフと云」西川忠臣撰、町人袋(享保四年刊卷三)に「かるふ。かるふなり、賃をいふ、おはれたしといふ事をいふことなり」といへる、かるふおはれといふことなり、この語現今も長崎で下流社會に用ゐられ、「子供を養うて」といふを、「子供をかるう」といふと云ふ。

***かわく** 盗みかわくは何奴ちや(丹波與作) どののらをかかわくやら(大經師) てんがうかわくに紛れない(今宮) 貞利新左衛門が女房鈴鹿といふ目口かわきのばつさい者(千正太)

氣沖く(殿または湯)の義であらう。はしや

ぐ。輕々しう面白がつて行ふ意。「かわきは
柳成名詞。

*かんおうなふじゆ 八大龍王・天龍
八部・感應納受の誓の舟(天神記)

〔感應納受〕感應は感應道交といふこと。衆生の
信心力を感といひ、佛菩薩の大慈力及び法
力を應といふ。道交とは、この信心力と大悲
力・法力とが往來し通じること。衆生と佛菩薩
とが感應して納め受けられること。

かんかん 晋の韓幹が馬を寫され
し、我又其駒の圖を傳へ覺えて候

へば(反魂香)
〔韓幹〕唐時代、大梁の人、善く人物を寫す。特
に畫馬に工みで、王維その畫を見て歎其たと
いふ。易林本・節用集に、「韓幹、唐朝人、
畫馬形」。

*がんぎやすり がんぎやすり・鉸
肌、突くやうで刺すやうで(吉岡染)

〔がんぎやすり〕
〔振袖始〕
〔雁木鐙〕和漢三才圖會、卷二十四、鐙の條に
「雁木鐙、著齒鏝、名之雁趾鏝」。

かんきゆう 内は裏なき浮世産、心
を延ぶる種ならし、漢宮の床の上
に契りたる千年の鶴に譬へ(齋藤山)

〔漢宮〕漢の宮殿の義、甘泉宮をいふたもので、
陝西涇陽縣西北山にあつた宮殿。この文は
内は、内は裏なき浮世産、漢光武皇帝と寵姫
李夫人とが甘泉殿で睡じり契りをした、其後
宮と思ひなし、夫婦離久しい契りを鶴壽千年
に譬へる意である。白氏文集の詩に「漢武帝
初娶李夫人……甘泉殿裏令寢眞……」
和歌・楊貴妃に「漢宮萬里の粧……」

*かんきん あさゆふの かんきんに
も其方女夫を祈るぞや(卯月絶) 奥

〔かんきん〕
〔奥〕

には女中の看經の聲(聖徳太子)ヤ
イはいれぬ鳴鶴、看經もする身で
これが眞の殺生かい(國性齋)

〔看經〕唐音(Kan-king)と經今の支那音は
Kan-king)である。も経文を誦讀するこ
とであるが、誤つて鉦を鳴し看經するにふよ。
〔鳴鶴看經もする身は〕はしぎの縁を見よ。

かんくてう 身の内まで凍こぼり、
寒苦鳥の苦し身かや(雪女)

〔寒苦鳥〕天竺の雪山に棲む鳥で、夜になれば
寒氣に苦しむといふ。録内拾遺、卷五、秋元齋
に「寒苦鳥と申鳥、寒鳥は寒苦通、身夜明造
果と鳴き、夫鳥は今日不知死、明日不知
レ死、何故造二作極、安穩無常
身と鳴く云々」。

*がんくび 吸付煙草の
煙管の雁首、首筋も
とからぞつと庄野の
六藏でなにか(丹波與
作)

〔雁首〕煙管の頭部をいひ、
古製は長くして雁の首に似
てゐるよりの稱。この文
は、雁首に首のよい女をき
かせ、雁首から同様の首筋の
いひつづけて、首筋もとのよ
い出女のもてなしに、心地よ
くてぞつとせうを庄野にひ
かたけたのである。

かんこくさい 火の廻り
氣を付けよかん・臭
い(蘇我太子記)

〔かんこくさい〕
〔蘇我太子記〕

歌口 干五上句 中六下口の
歌口 (孕常盤)

〔干五上句〕
〔中六下口〕
〔歌口〕

横笛には八つの孔がある、その孔の名稱。
かんこどり 壘もあげて閑子鳥、な
くにも泣かれず、興醒めはて(博多
谷の梟・閑子鳥、梢を渡る鼯鼠
や(鏝丸)

〔閑子鳥〕郭公鳥のこと。「かたつぼりどり」と
も云ふ。俳諧集覽に「かんこ鳥の啼やう。カ
ンコ鳥の聲はさびしきものなれば啼へいふな
り、かんこ鳥がうたふたふ。」「壘もあげ
て閑子鳥云々」とは、壘も上げて閑寂なるを閑
子鳥鳴くといふに、啼くに泣くをいひかく。

がんざうなます 練味噌かぶる牛蒡
どろぼう鯛の産物、飯も汁もがん
ざう鱈、けんこに置いたるめうがの
程ぞ恐しき(酒吞童子)

〔がんざうなます〕練味噌の訛である。魚を
「かちあなます」練味噌の訛である。魚を
「かちあなます」練味噌の訛である。魚を
「かちあなます」練味噌の訛である。魚を

*かんじがらみ 格子の柱にがんじ
堀網の類を打ち、がへて堅く掘めること「が
んじまき」といふ語もある、蓋しがんじは
「がんじまき」(強盛の唐音の訛であらう。一
説に雁字搦であつて、雁字形に搦めることだ
といひ、また岩文搦、岩垂搦、岩疊搦などい
ふ説もある)。

がんしき 四生六道二十五有、一切
含識中有の魂魄、今こゝに來現し
て(嵯峨天皇)

〔がんしき〕
〔嵯峨天皇〕

かんじやう 其方親子を差加へ、四
十七人忠義の武士と末代に名を留
むべし、これを冥土の感状と親父
に語り(蘇我太子記)

〔かんじやう〕
〔蘇我太子記〕

いふ。行事鈔資持記上四の一に「心依色中、
名爲含識、總攝六道有情之衆」。

*かんじやう 其方親子を差加へ、四
十七人忠義の武士と末代に名を留
むべし、これを冥土の感状と親父
に語り(蘇我太子記)

〔感状〕軍功を感賞して大将から與へる褒美の
書状。

*かんしん 韓信は市に股を滑り(靈
女) 股をめぐり韓信が堪忍丈夫
も斯くや(今川了庵)

〔韓信西漢時代の人、未だ歴に就かないで家
貧であつた時、淮陰の辱中の少年辱事を頼み、
信を侮り辱しめて言ふに、汝大きな形で腹を
帯びてゐるも男姓者だ、勇氣があるならば
腹で我を刺せ、それがならぬならば我等の腹
を滑れと、信つらつらと視て俛して股を滑つた
ので、市中の人皆大にあげつた。後に信西
漢の高祖の將となり、楚の項羽を滅し、功に
よつて淮陰侯に封ぜられた。詳しくは史記淮
陰侯傳を見よ。

かんすゐらく 胡飲酒酣醉樂など舞
樂を奏し(女護鳥)

〔酣醉樂舞樂の名。源氏物語、稚木の卷に「酣
醉樂あそびて、水にのどむたる麗云々」と見
え、花鳥餘情第二十五に「村上御記應和元年
閏三月十一日、藤原、舟樂奏、酣醉樂、舞人四人
云々、今案酣醉樂は右樂なり、船樂に其例よ
せあるにや」と見えぬ。

がんぞうなます
「がんぞうなます」を見よ。

がんた 跛の根本がんだの謂れば、
これこのこのこの猪を止めたる勸

〔がんた〕

介が譽を代代に傳へけり(川中島)

「かんじち(眼一)の約轉。片目。

***かんたう** 母が嘆くが目出度いか恨めしの心やな、七生までのかんたうぞや(加増留秋)

「勸諭」若・父・師などの目うへの人の心に逆ひ縁を絶つて逐はれること。勸當はもと罪の輕重を勘へて法に當てる義。唐書に「軍中不唯勸當」。

***がんだう** すりの・かたりの・がんだうの(女腹切) 晩の泊に寢處へがんだうつて、やじりきつてくれうぞと(孕常盤)

「強盜」唐音(chiang-tau)を傳へた語であらう。「強盜打つ」の打つは打入る意。

***がんだうづきん** 膽の太き同類二十四人引具し、並木の歩み來る如く、一樣のがんだう頭巾、保輔齊明を近付け(關八州)

「強盜頭巾」覆面頭巾のこと、顔及び頭を包隠して、目ばかり現はすやうにした頭巾。燕石十種陸の笠手巻に、「強盜頭巾」とて狩人の被る如く描く。



「強盜頭巾」

「被るものあり、苧紐染」などにて組みたるもあり、紐は内へ付る也、尤昔より狩人の被りて歩きたるものなり、賤者の被るものにて、常の日用ありは甚だ不入柄の物なり。

***かんづか** 左馬五郎恐れて遁ぐるを、飛掛つてかんづか取つて打伏せ(三國志) 小藤太がかんづか掴んで取つて引伏せ(扇八景) 心得たり

とかんづか取り、三間ばかりかつばと投げ(小栗判官)

「かみづか(髪束)の音便。髪もどり。自樂舞、地獄樂日記(寶曆五年刊)に「起しも立てず乗つかり、本當なればとどめの刀、命冥加な下郎かなと、かんづか掴んで縁の下へ投落せば」。

***かんづよし** 前脚とつてかんづよし、雪崩碎く白泡に(繪祝三)

「驛強」馬強く性荒くして人を突くやうなのをいふ。貝原好古撰、騾草に「驛、馬の突也、馬のかんのつよしと云は此字なり」。

大鷹虎雜物語(第五)に「驛怖ぢす」とあるも、驛強くして物に驚怖せぬ意。

***かんなづき** (國語彙)

舊曆十月の稱。この月新穀を神に奉れば神嘗月の義であらう。「いつはりのなき世なりけり云々」をも見よ。

***かんいち** たた何事もかん日と、聲も涙にかきくろる(大經師)

「坎日舊曆上の語である。大經師(寛永十一年刊)に「かん日は、針せす身のあかを洗はず衣裝も洗はぬなり」延寶四丙辰伊勢殿註に「かんはよろしからざる日なり、あかをとおさすのりをつけぬはひが事なり」こと、この文は、堪忍の堪に坎日をかめたので、大經師に關係ある處上の語を用ゐて文をかきつたのである。

***かんばう** 遠坂舎人かんばうにて年月を送られしが(吉岡染)

「君切菴叢抄卷四に「福院に在て後見し、又留守する僧を云」と見えてゐる。轉じて後見の意にいふ。

***かんばうくづし** なう久作殿、此方一人は何してもゆるりと過ぎかれぬ身をもつて、女房子ゆゑにかん

ばうくづし憂き苦勞、さりながらまあ四五五年、彼の萬虎が十二三になるまでぢや(抱朴)

「かんばう」はかはばう(皮坊)の説で、皮剝を職とする職人の義「くづし」は「崩しで、身を持弱すこと」である。下等人に寄落すをいふ。醒睡笑六、繼のみちの條に、「ちかはあど迷ぐる處もかむころもあらうするに、あのかんばうだふれが山根の木の根にかがみ事はと叱られ」とある「かんばうだふれ」は皮坊倒れで、人を罵つた語であらう。現今も羽前國村山脚、南武藏相模などの地方では、皮坊をかんばうといふ。

***かんひ** 韓非申不害が劔術を傳へ(唐船類)

「韓非」秦時代の人で荀卿の門人である。刑名、法術の學を攻めて韓非子二十卷を著す。秦に使して李斯の爲に毒殺された。韓非は思想家ではない。

***がんに** あら不思議や、がんにの筆の竹の虎の筆勢に少しもまがふ所なし(反魂香)

「顔師」師は唐音(三)である、即ちその音を傳へたものである。易林本・節用集に「顔師、元朝人畫達磨」顔師は字を秋月と云ふ、好んで道釋人物を描いた。鴉翁家藏案には、鬼を畫くことが妙であつたと見えてゐる。

***がんにま** 女犬と男犬とが戀をし、その男犬ががんにまくなわやく者(千正犬)

「岩若」機軸器説。合類大節用集(享保二年刊)人倫門に、「岩若、今世謂之兒童之狝鬻」爲二(岩若)とある。

***冠の板** 錦革の物の具、同じ毛の冠草摺、冠の板より芝打まで、金

具に打つたる忍草(三國志)

鏡の袖の上部の板をいふ。萬葉草子に「甲のゆんでの吹返・面の板をいふ。ゆんでの冠の板かけてつんど切て落しける」。

***かんもん** 主の身なれば御機嫌よかれが道理の肝心かんもん、さあはつと飲みかけ、わさわさわつさり頼みます(天網島) 殿様はどの名將なれども、奥様お持ちなされぬゆゑ、かんもんの挨拶を御存知ないが玉に疵(千正犬)

「屏文」狂言布施無經などの中にも見えて、肝要の文の義轉じて肝要の意にいふ。かんじん

***かんもん** 菅家清家安倍下部の勘文、善惡の理分明ならず(女夫池)

「勘文」かんもんとも云ふ。昔時陰陽師儒者などが古例や方角や故實などを勘考して意見を記し、朝廷または將軍家に奉つた文書。

***かんややく** 石藥漢藥にて毒蟲などの方組は毒藥にては候はぬか(繪泉節)

「漢藥」漢方藥。支那朝鮮から傳へた藥。かんりんがくし 翰林學士の書翰の草、御殿の天盃賜ひければ(大徳院)

「翰林學士」唐玄宗の時、翰林學士院を設け翰林學士と稱して専ら詔勅を授る。明清を経て多少の變遷がある。我國の文章博士といふやうな者である。事物紀原に「唐太宗時、名儒時々召以草制、特詔常於北門、候進止、號北門學士、明皇改曰翰林、開元二十六年乃爲翰林學士」。

き

***きあひ** ああおとましい事出來ま